

第5章 台湾の中学校の「郷土芸術活動」 における郷土美術

平成10年7月発行のつくば市立吾妻小学校のPTA広報「あづま」には、「故郷の風景」と題した鹿嶋俊英氏の文章があった。「私は、北陸の稲作地帯で育ちました。見渡す限りの田んぼ以外何もないところでしたが、縄文時代の遺跡が発掘されたとかで、最近ちょっと活気付いています。故郷として目に浮かぶのは、くねくね曲がった土の道だったり、家の脇を流れていた古川だったり、小学校の木造校舎だったりします。……さて私たちの子供たちはどんな故郷を心に刻んでいるのでしょうか。街の景色はまだまだ変わりそうです。田舎育ちの私には不思議でもあり興味もあります。でも故郷の風景は、一緒に遊んだ友だちや教わったり叱られたりした先生方、親や周囲の人間たちに彩られているものではないでしょうか。子供たちに懐かしい風景を残してあげられたらと思っています。」⁽²²⁹⁾ このように鹿嶋俊英氏は、自身の心に残っている故郷のイメージを描いている。

有名な文学作家ではなく、ただ我々の周りにもよく見られる一人の小学生の親である鹿嶋氏のこの文章によって、社会がいかに変わっても、科学技術がいかに進歩しても、人間関係がいかに疎遠になっても、人間の心と故郷の風土とつながりはまだまだ深いことが実証された。しかし、日本においては、この人間の成長に切り離してはならない「故郷の風土」に近い意味を持つ「郷土」という言葉が、戦後から徐々に「地域」に取り替えられて、消えてしまった。行政的な色彩の強い「地域」という言葉が、本当に人間の心に生きている「郷土」に代わるものになっているのかは疑わしい。したがって、研究論文には「地域」の言葉の意味を十分に理解せずに、誤用する例がしばしば見られる。

さて、視点を台湾に移して、注目されている教育の新動向を見てみよう。台湾における21世紀への教育改革では、「国際的視野を持ち」、「郷土教育を重視」し、「人文精神、芸術文化を充実」等の方針に基づいた具体策が次第に打ち出されてきた。郷土教育教科の学校教育への導入は、これらの具対策の一つである。

歴史を見ると、郷土教育を重視するために、教科として学校教育に取りいれて実践した国がある。その中で最も知られているのは、20世紀初期のドイツと昭和初期の日本であった。そして、21世紀間近の今日において、台湾も新しい教育改革により、小学校では「郷土教学活動」が1996年に、中学校では「郷土芸術活動」と「認識台湾」が1997年に、新しい教科として正式に導入された。それぞれの教育内容を分析すれば、前述のドイツや日本の実践例とは違って、「多元文化教育」に基づいて、長年無視されてきた台湾の原住民文化、開拓時期から三百余年を経て伝わってきた台湾の各地方の文化などを総合的に再

⁽²²⁹⁾ 鹿嶋俊英「故郷の風景」『あづま』、吾妻小学校、1998年、8頁

評価し、子どもに認識させる内容となっている。

この学校教育の郷土教科における郷土美術の学習では、それぞれの地方や民族の文化の特色が取り挙げられている。従来の台湾の美術教育は、中国と西洋の二本の柱で支えられてきたが、現在、郷土美術という新しい要素が注がれることによって、更なる発展が期待できるであろう。

これらの一連の動きは、台湾の美術教育において台湾本土的理念の確立とカリキュラムの開発に大変深く関わっている。しかし、今日のように「郷土美術」が、学校教育、社会教育だけでなく、家庭教育の場でも話題として議論されていることは、台湾の美術教育の歴史では、最初であり、しかも、ごく最近の五、六年の出来事である。

しかし、注意しなければならない点は、「多元文化教育」に基づく台湾での「郷土教育」の実践が、過去のドイツや日本の民族主義を強調しすぎる「郷土教育」をそのまま踏襲したものではないということである。むしろ、それは台湾での異文化理解を通して人間尊重を望むような国際理解の基礎教育を目指したものであると考えられる。

本章では、その中で中学校の「郷土芸術活動」における郷土美術を研究対象として取り上げたい。まず、台湾の中学校教育における美術教育の変革を探り、その具体的変革内容をまとめてみる。そして、台湾の中学校の新しい課程標準における「郷土芸術活動」の目標、内容、学習と指導、その中での郷土美術の内容などを明らかにする。また、中学校を中心とする「郷土教学活動」の実施状況に関しての現地調査の結果を考察する。本章の目的は、これらの考察を通して、中学校教育の郷土教育において、郷土芸術が一つの独立教科として取り扱われていて、小学校よりも重視されていること。その内容が、小学校の「郷土教学活動」における「郷土芸術」の内容を更に充実・発展させてできたものであること。そして、生徒に与えた影響などを解明することである。

第1節 中学校における美術教育の変革

「郷土教育の実施を確実にする」の方針の一つである、「小・中・高各段階の学校教育課程の一貫化を目指す」ことに基づいて、中学校では、「郷土芸術活動」及び「認識台湾」という教科が新設され（表5-1参照）、一学年の音楽、美術それぞれの時間も一時間増えた。そして、「郷土芸術活動」における「郷土美術」の時間を加算すると、実質的に美術の時間数が増加した。また、台湾の各地方の美術、演劇、音楽、方言、民俗体育についての研究も部活動に取り入れられている。

1. 中学校「美術」科の動き

郷土美術教育の実施は、実際に「郷土教学活動」及び「美術」の二つの教科によって推進されている。

「郷土芸術活動」科における郷土美術の教育については、後の第2節で詳述するので、ここでは「美術」科について述べてみたい。

表5-1 台湾の中学校科目及び毎週時間数

教科 時数 学年	国 文	英 語	数 学	認 識 台 湾 ： 社 会	認 識 台 湾 ： 歴 史	認 識 台 湾 ： 地 理	公 民 と 道 徳	歴 史	地 理	生 物	理 化	地 球 科 学
1学年	5	3	3	1	1	1				3		
2学年	5	3	4				2	2	2		4	
3学年	5	1 +(1)	2 +(2)				2	2	2		2 +(2)	1

教科 時数 学年	健康教育	家政・生活科技	電 脳	体 育	音 楽	美 術	童 軍 教 育	郷 土 芸 術 活 動	輔 導 活 動	団 体 活 動	選 修 科 目	合 計
	1学年	2	2		2	2	2	1	1	1	2	1~2
2学年		2	1	2	1	1	1		1	2	2~3	35~36
3学年		2	1	2	1	1	1		1	2	2~5	30+(5) 33+(5)

今回の新しく改定された中学校美術科課程標準の内容も小学校の「美勞」と一貫して、「郷土」の特質が反映されていることが色濃く見られる。題材としては、郷土玩具、郷土工芸、民俗芸能の造形、民俗行事の道具、装飾、原住民の伝統美術など、各地方の風土や資源の特色を表現できるものが望まれている。具体的な例として、以下のようなものが挙げられる。

①教材綱要における「心象表現」領域の素材内容には、各学年共通に生活周辺にある入手しやすい自然素材、人工素材、そして、「郷土文化の特質を持つ素材」への利用が強調されている。第一学年の「機能表現」領域の素材にも生活周辺にある、あるいは本土性、地域性文化特質に富む素材を適切に利用することが示されている。第二・三学年になると、このねらいは生活周辺にある平面的、立体的、地域性文化特質を持つ各種の素材を適切に利用することになっている。

②「鑑賞」領域における「美的判断」でも、第一学年では、地方や「社区（コミュニティ）」における自然と生活環境との相互関係を鑑賞し、重視することが示されている。第二・三学年になると、日常生活における自然と生活環境との相互関係とその価値を重視することになっている。

③教材綱要における「実践」領域では、一学年の場合は、自然資源を鑑賞し、保護することにより、環境保護の意識を喚起し、自らの生活芸術化と芸術生活化の理念を実践して、生活の品質的向上を進めることがねらいとされている。第二・三学年になると、環境保護の意識を強化し、人生の美化、多元文化価値観などの理念を実践し、生活の品質的向上と人類の平和へ促進することが示さ

れている⁽²³⁰⁾。

④実施方法における教材の選択・編集要領の第五項目には、教材は生活周辺、地域文化から選び、各学期の指導重点と学習技能を設定し、区分して、学校の設備と社会資源（博物館、美術館、文化センター、社区芸術家など）を十分に応用すべきであることが示されている。第八項目には、鑑賞教材の選択・編集に教材内容について注意すべきことは、生徒の発達と文化背景を配慮なことが示されている。第一学年においては、本土的、地域的芸術品を中心とし、第二・三学年になると、多元文化的芸術学習を増やしはじめるとする。

「心象表現」領域においては、各学年共通に生活周辺にある入手しやすい自然素材、人工素材、そして、「郷土文化の特質を持つ素材」への利用について、いくつかの具体例が挙げられている。

⑤美術教科書における実例

康和出版社の『国中美術1』（第一学年）の水墨画的表現の「創作天地」単元には、1.藤椅子を焦点とし、その椅子に置いている編物や、床に落ちている赤い毛糸の玉で描き出された「閑情」、2.自分の家の片隅にある飼っている鳥と鳥籠や、女の子、置いている自転車で構成された「おとなしい鳥ちゃん」、3.台湾の伝統建築が散在している町の一隅と庭に見られる大きな葡萄樹棚で構成された「尋幽」の三つの作品（資料5-1参照）が見られる⁽²³¹⁾。これらの作品は、いずれも生徒の作品であり、生活周辺や町の様子を表わす題材である。

『国中美術2』（第二学年）の「多種多様な彫塑」単元には、台湾作家の楊英風の「鳳翔」、朱銘の「人間系列」、張子隆の「馨」などの現代的表現や、楊英風の「蓑衣」、謝棟梁の「私とともに」、朱銘の「功夫」などの郷土風表現の作品が鑑賞作品として掲載されている。また、郷土工芸の捏麵人作品である施錦江の「関公」も見られる。この単元の彫塑技法の学習について、石膏円柱を彫る彫刻と針金、麻縄、油粘土を用いる塑造の二つの技法を中心とするものが、紙粘土を用いての、捏麵人的表現も紹介されている⁽²³²⁾（資料5-2参照）。

『国中美術3』（第三学年）においては、鑑賞教材の選択・編集の第二・三学年での、多元文化的芸術学習を増えはじめるとする原則にしたがって、外国作品の写真教材が増えたが、台湾作家の作品も多く見られる。例えば、鄭善禧の「碧潭泛舟」、薛清茂の「石碇風光」、陳律明の「玉山」、袁金塔の「中山北路」、黄銘祝の「新竹老街」、馬白水の「苗栗風光」などがある⁽²³³⁾。これ

⁽²³⁰⁾ 中華民国教育部編『国民中学課程標準』、教育部、1994年、371-382頁

⁽²³¹⁾ 丘永福『国中美術1』、康和出版社、1997年、10-11頁

⁽²³²⁾ 丘永福『国中美術2』、康和出版社、1997年、82-87頁

⁽²³³⁾ 丘永福『国中美術3』、康和出版社、1997年

らの作品の一つの共通点は、水墨画、洋画に問わず、台湾各地の風景をテーマとするものがほとんどであることである（資料5-3参照）。

2. 注目される原住民の美術工芸

台湾の原住民は、過去、平地に住んでいた約10民族の「平埔族」と現在まだ多くの山地に住んでいる約10民族の「高山族」に分かれている⁽²³⁴⁾。考古学によれば、その移住説はまだ一致していないが、台湾に在住する歴史は漢民族より長いのは事実であり、台湾の有史前の文化とのつながりもよく指摘され、現在、その人口は、約36万5千人で、台湾の人口の約1.7%を占めている⁽²³⁵⁾。従来の漢民族を中心とした、中国文化に焦点を合わせた戦後の台湾の教育政策は、原住民文化の独自性を保有する方針ではなく、むしろ彼らを「漢化」（漢民族の生活習慣に化すること）する方針が明らかであった。

（1）原住民文化に関する研究

原住民文化のシンボルである原住民の美術工芸についての研究は、日本の学者である伊能嘉矩、新井英夫、佐藤文一などが、すでに早い時期に進めており、関連著作も多く見られる。陳奇録（チンチル）、阮昌銳（ルアンツァンルエ）、任先民（ゼンセンミン）、劉其偉（リョウチウエ）、施振樞（スツンスウ）、高業榮（カウエゾン）、李亦園（リイエン）、明立国（ミンリコウ）などの台湾の学者も知られている。原住民の美術工芸は、その実用性、社会性、宗教性、伝統性、象徴性などの特性を持ち⁽²³⁶⁾、民族によって、多少違っているが、陶器、彫刻、服飾（紡績、張り縫い、刺繍など）、草木編み、建築に分類されている。また、小学校の「郷土教学活動」教科と中学校の「郷土芸術活動」教科においては、それぞれ郷土美術内容での一つの独立項目として扱われている。

（2）山本鼎と台湾のパイワン族

ここで、原住民美術工芸に関する一人の日本の美術教育家の見解を紹介する。山本鼎は大正15年1月に出版した『婦人之友』第20巻第1号における「装飾図案の学習」と題した文章で「私はこれから一年間、此紙上で装飾図案の指導に当たります。」と巻頭で述べて、各民族はそれぞれの独自の美の様式を主張

⁽²³⁴⁾ 李壬葵「珍惜没有文字的語言」『全国原住民教育會議実録』教育部、1996年、10頁

⁽²³⁵⁾ 李建興「台湾地区原住民教育現況与展望」『全国原住民教育會議実録』教育部、1996年、19頁

⁽²³⁶⁾ 阮昌銳「台湾原住民的社会与伝統工芸（下）」『美育月刊』58号、国立芸術教育館、1995年

し、台湾の原住民の美術工芸に関する記述を主要な例とした。台湾の原住民の一族であるパイワン族のシンボルの百歩蛇と機織の婦人の2枚の写真（資料5-4参照）とともに掲載されている山本氏の記述は次のようなものである。

・・・何等文化的雰囲気をも有たぬ蕃人の生活にも澤山に且つ立派な装飾図案が創作されて居る事です。今日では同じ日本人である台湾の山地住民の室内装飾や、衣服や、装身具や、楽器や、武器や、刺墨などにその例を挙げる事が出来ます。彼れら十三萬の所謂生蕃人には美術館も展覧会もありませんでしたが、八千年前埃及人に現われた美に關した本能と知恵は彼れらにも与えられて居て、彼れらは蕃地で祖先のお使姫とせらる、百歩蛇という毒蛇の脊紋や、人間の裸形や、顔、祝日でなければ狩りしない事になって居る貴い山の幸なる鹿や、祝宴にのみ用ひられる神聖なる酒杯など、僅かに五種類程のものを材料にして各種の装飾図案を作りました、彼れらの陳羽織のやうな礼衣、衣裳、珠衣等を見て、野蛮さに人は破顔しますが、注意を、其処に行はれて居る装飾模様にあらず、東京で威張って居る婦人手芸家の装飾的技能和対照して見度くなるでせう、それは実に板について居ります、品物にぴったりし、諸材料が充分に活かされています、銀貨や貝釦が彼れらの手にはいると、模様の美しい素材となるのです。彼れらは極く素純に、物の有つ形状や、色彩や、光澤の美を悟って居るのです⁽²³⁷⁾。

美に關した人間の素朴で純粋な本能を抹殺し、原住民を輕蔑する現実の教育に対する批判をした山本氏は、教育がこのような働きを取り戻したとき、原住民の持ち得ない肉のある美術ができると考え、「とにかく皆さんは蕃人の如く小学生の如く率直におはじめなさい」と願っていた⁽²³⁸⁾。

機織のパイワン族婦人の写真に付く「四千尺の山地で私が撮して来たもの、彼れらは今、七色の呉呂糸で自分用の礼衣を、織って居るのです。むかふのお婆さんは喪服を着、刺繡をして居るのです」（上述の写真の説明）の説明により、上述の記述は山本氏が台湾の高い山地にあるパイワン族の部落に入り、現地調査を行って見たものが明らかに分かった。約80年前の山本氏の関心と呼んだ台湾の原住民美術工芸は、現在の台湾の美術教育において、その価値を更に認め、学習内容として学校の美術教育課程に導入されている。逆に、日本の北海道においても台湾の原住民美術工芸と類似するものが豊かに存在しているが、

⁽²³⁷⁾ 山本氏「装飾図案の学習」『婦人之友』第20巻第1号、婦人之友出版社、1925年、161頁

⁽²³⁸⁾ 同上、161-162頁

今だに日本の美術教育者たちの関心を喚起していないのは非常に残念なことであると筆者は思う。

(3) 学校教育に導入されている原住民の美術工芸

この原住民を漢化する方針も40余年続けて見られたが、やがて新しい教育改革が「多元文化を重視する」方針を打ち出した後、民間の動きと連動して、「原住民教育法」草案の制定、原住民各族の文化の独自性に基づいて編成された原住民教育カリキュラムの実施、「芸術教育法」に基づいて推進されている原住民芸術の研究、そして、「文化資産保存法」に基づいて進められている「民間芸術保存伝習計画」に取り組みされている原住民芸術の保存と伝承などの具体策が次々に実施された。

具体的に言えば、原住民文化が学校教育において全般的に重視され、関連教科のカリキュラムにも取り入れられて、台湾文化の重要な一環として教えられている。著しい例としては、小学校の原住民各族の教科書も開発され、普通の教科書と併用されていることや、小・中学校の郷土教科、美術、音楽などの芸能教科の教科書には、原住民の教材の割合が多くなったことや、「社区総体营造」（町づくり）計画と取り組んでいる原住民の子どもの多い小・中学校においての伝統芸術カリキュラムの導入などが挙げられる。

① 来義国民中学の実例

来義中学校の所在地は、台湾の最も南の屏東県であり、校長をはじめ、全校の約500名の生徒はすべてパイワン族である。教育庁の「新山村計画」と連携で、選択科目の美術、技芸課程を設け、山地芸術教育を推進している。この美術と技芸課程は伝統舞踊クラスと伝統彫刻クラスの二つの領域を中心とするものである。伝統彫刻クラスの学習内容はパイワン族の伝統木彫、石彫の技法である⁽²³⁹⁾。

パイワン族彫刻家の高富貴（族名リアス）氏によれば、パイワン族の伝統木彫は、「装飾性」、「平面性」、「充填性」をもち、太陽紋、百歩蛇紋、刀剣紋、弓矢紋、人頭紋、獵師紋などの紋様で、立柱や、板を掘り、貴族、先祖、戦績などを象徴する題材の作品を作る。石彫の場合は、通常、人間の身長より長い石板を用いて、男女の像を表現する。素朴で簡潔な線により、自然平順な表現はその特徴である⁽²⁴⁰⁾。

⁽²³⁹⁾ 作者不詳「古楼村排湾族文化と教育田野調査」『美育月刊』第66号、国立台湾芸術教育館、1995年、52頁

⁽²⁴⁰⁾ 同上、49-50頁

②中学校の『郷土芸術活動』における実例

苗栗県の『郷土芸術活動』は、当地に多く見られる泰雅族と賽夏族の生活文化と芸術について、「泰雅族と賽夏族の生活儀式と信仰祭典」、「泰雅族と賽夏族の造形芸術」、「泰雅族と賽夏族の音楽と舞踊」のような項目で詳しく解説している（資料5-5参照）。

その中、「泰雅族と賽夏族の造形芸術」の内容は、表5-2のように四つのジャンルで構成されている。

表5-2 泰雅族と賽夏族の造形芸術

顔入れ墨 (黥面) 国宝	男女問わず、幼年にすでに前額に入れ墨をし、他族と識別する。成年になると、また、それぞれ異なる入れ墨をする。成年の入れ墨の意味は、男子の場合は、顎の中央に直線の模様を入れ、その英知と勇気を表彰することであるが、女子の場合は、両方の頬に太い斜線で「V」の形を入れ、下唇を通し、その手先の上達と心身の成熟を象徴することである。この顔入れ墨の習慣は、日本の統治により、1914年から廃止された（資料5- 参照）。
紡績 服飾	泰雅族と賽夏族の社会においては、紡績は女性の仕事とされている。その主な材料は苧麻であるが、平地との交わりによって、ウールや綿も用いられようになった。「夾織」の技法で、「Z」形、方格形、三角形、菱形などの模様を表現し、華麗な服飾を作り出す。色は鮮やかであり、赤、白、黒は主な色である。また、賽夏族の方は衣服の付属品や、装身具に貝殻、貝珠、骨、竹、木の実、種などを飾る技法が特徴である。
居住 建築	桃園、新竹、苗栗地区は竹の産地なので、両族とも竹を使って家屋や展望台など建物を建てる伝統をもつ。家屋の屋根は茅草で被り、中央の正室に「火塘」（囲炉に相当するもの）が置かれ、日常生活の中心場所と屋内宗教儀式を行い場所とされる。
編織 工芸	両族とも編織工芸を男子の仕事として、少年期の男子は自分の父親に編織技法を習い、生活用具を作る。藤、竹、木など主要材料を利用して、斧、山刀、小刀、鋏形鑿、佩刀、鋤（木や石で作ったもの）、鑽などの道具で方格編、斜文編、絞織編、柳条編、透孔六角編、透孔十字編、三角編、螺旋編などの編織技法や木工技法を組み合わせて背籠、桶、魚籠、貯水器、藤帽などを作る。両族間の編織工芸は類似点が多いが、相違点も少し見られる。例えば、背籠の形を見ると、賽夏族の方は2本の肩帯があり、両肩の力で荷物を負うが、泰雅族の方は額帯があり、頭の力で荷物を負う子とが分かった。

③筆者が調べた原住民の伝統芸術伝承計画を導入する学校は上述の学校を除いて、まだ多くの学校が成果を残した（資料5-6参照）。次の資料は、宜蘭県の「学校薪伝」計画、花蓮県の『85（1996）学年度国民中小学伝統芸術教育成果特集』、基隆・宜蘭・花蓮・台東の『86（1997）学年度国民中小学伝統芸術教育成果特集』を参考し、それぞれの学校と導入する芸術の種別を表記するものである。

表5-3 原住民の伝統芸術伝承計画を導入する学校リスト

県名	種類	学校名
花蓮	楽器（ムックリ）	秀林国民中学
花蓮	音楽・舞踊	吉安国民中学（阿美族）、平和国民中学（阿美族）、馬遠国民小学（布農族）、富世国民小学（タロコ族）、立山国民小学（タロコ族）、豊濱国民小学（阿美族）、光復国民小学（阿美族）、景美国民小学（タロコ族）、
花蓮	木彫	太巴朗国民小学（阿美族）
花蓮	陶芸	太巴朗国民小学（阿美族）
花蓮	藤編	見晴国民小学、三棧国民小学
花蓮	飾物（布農族）	太平国民小学、崙山国民小学
花蓮	機織	崇徳国民小学（泰雅族）
宜蘭	楽器（ムックリ）	武塔国民小学
宜蘭	音楽・舞踊（泰雅族）	南澳国民中学、大同国民中学、南澳国民小学、金岳国民小学、碧候国民小学、四季国民小学
宜蘭	機織・藤編（泰雅族）	東澳国民小学、金洋国民小学
台東	木（石）彫	都蘭国民中学（阿美族）、安朔国民小学（排湾族）
台東	刺繍	安朔国民小学（排湾族）

第2節 「郷土芸術活動」教科の内容と指導

1997年8月に実施され始めた新しい『国民中学課程標準』（日本の指導要領に相当し、1994年10月に告示された）において、「郷土芸術活動」という科目が新しく作られた。その内容は、年中行事、民俗祭典、原住民祭典を通しての「郷土芸術活動への認識」、平面造形、立体造形、原住民造形芸術で構成される「郷土造形活動」、地方の民謡、民俗器楽、舞踊、演劇、そして原住民歌謡・舞踊等で構成される「郷土芸能活動」、そして郷土芸術の展示と実演の四つの領域からなっている⁽²⁴¹⁾。特に「郷土造形活動」には、伝来した中国の閩（ミン）、粵（ユエ）地方や、台湾の原住民や、台湾の歴史発展に一頁を占めているスペイン、オランダ、日本等による美術・工芸・建築が学習内容として取り入れられている。

1. 教科の概要

(1) 目標

「郷土芸術活動」の目標を分析すれば、認知、情意、技能の三つの領域に分けられる。認知領域では、生徒に郷土芸術活動の内容や、現代生活、社会文化への影響を認識させ、理解させることを主にする。情意領域では、家庭、郷土、国を愛する精神と、郷土芸術活動の日常生活での活用する能力を育てることがねらいとされている。技能領域では、生徒の郷土芸術活動への参加を励まし、その欣賞（喜んで見る）、保存、伝承などの能力を育てる目標もある。そして、その認知と情意の二つの領域が、技能領域より強調されていることから、郷土芸術技能の習得することは、この教科の主要な目的ではないという美術教科の目的との区別が明らかである。それらの目標を具体的に挙げれば、次のような五つがある。

- ①郷土芸術活動への認識を増進し、郷土文化を理解する。（認知）
- ②郷土芸術が現代生活、社会文化に与えた影響と郷土芸術に従事する人の文化への貢献を理解する。（認知）
- ③郷土芸術活動への参加を励まし、郷土芸術の欣賞、保存、伝承などの能力

⁽²⁴¹⁾ 教育部「郷土芸術活動」『国民中学課程標準』、教育部、1994年、412-417頁

を育てる。(技能)

④郷土芸術への関心を高め、家庭、郷里、国家を愛する民族文化の情操を培う。(情意)

⑤郷土芸術活動への興味を持ち、充実したレジャーを過ごす。(情意)⁽²⁴²⁾

(2) 内容

今回の改訂には、新設教科である「郷土芸術活動」の内容は、郷土芸術活動への認識(郷土芸術活動簡介)、郷土造形活動(郷土造形芸術)、郷土芸能活動(郷土表演芸術)、郷土芸術の展示と実演(郷土芸術展演)の四つの領域を含め、さまざまな特徴が挙げられている。例えば、小・中学校の課程編成の一貫化が強調されていることが、その特徴の一つである。つまり、中学校の「郷土芸術活動」の内容を見れば(表5-4参照)、小学校の「郷土教学活動」教科に含まれている郷土戯曲、郷土音楽、郷土舞踊、郷土美術などの内容を更に発展し、充実したものであることは、この特徴の実証であると考えられる。

表5-4 「郷土芸術活動」の内容

郷土芸術活動への認識	<p>年中行事：大晦日、新年、清明(チンミン)、端午、中元、中秋・・</p> <p>民俗祭典：民間宗教信仰、節気、生命礼儀(誕生、成人、結婚、葬儀・・)。</p> <p>原住民の生活礼儀と祭典：冠婚葬祭の礼儀、豊年祭、播種祭、疑霊祭(アイリンチ)、軍神祭、狩猟祭、船の進水祭・・</p>
郷土造形活動	<p>平面造形：民俗版画、廟宇の彩絵、民間の吉祥図画、伝統演劇の顔譜</p> <p>立体造形：古跡、廟宇(建築、家具、花堤灯、凧、彫刻、草木編み、その他(郷土玩具、焼物、ガラス工芸・・))</p> <p>原住民造形芸術：彫刻、器物、建築、紡績、編み、服飾</p>
郷土芸能活動	<p>郷土民謡：福老系民謡、客家系民謡</p> <p>郷土戯曲、雑曲：歌仔調、民謡調、雑唸調</p> <p>民俗器楽：鑼鼓楽(ロクイエ)、鼓吹楽(伝統楽器のラッパ)、絲竹楽(中国の伝統的管楽器、絃楽器)、絲竹鑼鼓合奏</p> <p>郷土演劇：歌仔戲(カツアイシ)、皮影戲、布袋戲、傀儡戲、その他(北管戯曲、南管戯曲、車鼓戲、採茶戲・・)</p> <p>郷土舞踊：八音舞(パイウ・孔子の誕生祭典に踊る)、跳加官(祝福の舞踊)、採茶舞、豊収舞</p> <p>郷土祭典舞踊：車鼓舞、牛犁陣(耕作舞)、闘牛陣、その他(舞龍、舞獅、宋江陣、八家将)</p> <p>原住民歌謡、器楽、舞踊等</p>
郷土芸術の展示と実演	各学校、各クラスが郷土芸術の展覧会や公演を行うこと

⁽²⁴²⁾ 教育部前掲書、411頁

以上の四つの領域の主な指導方針に関する、次のような説明がある。

①郷土芸術活動への認識：年中行事、民俗祭典、原住民の生活礼儀と祭典の起源、意義、伝説、関連する芸術活動を紹介すること。

②郷土造形活動：郷土造形芸術における平面造形、立体造形芸術、原住民造形と生活との関連、それぞれの様式、模様、色彩が象徴する意味、それぞれの製作技法、過程について説明すること。

③郷土芸能活動：郷土民謡、郷土戯曲・雑曲、民俗器楽、郷土演劇、郷土舞踊、郷土祭典舞踊、原住民歌謡・器楽・舞踊それぞれの特色、表現技法、表現様式、そして文化、生活との関連を紹介すること。

④郷土芸術の展示と実演：各学校、各クラスが郷土芸術の展覧会や公演を行うこと。

これらの領域の具体的内容は表5- が示しているものである。

また、新しく公布された『国民中学課程標準』の実施要点によれば、その新設科目である「認識台湾」の地理篇の問題集と「郷土芸術活動」の教材の編集と使用は、各地方の教育行政機関及び学校の教師に任せると明記していることが分かった。この特徴も今回の現地調査で収集した台北市、台北県、高雄市が編集した『郷土芸術活動』に地方の特色が取り入れられている内容構成により、明らかになった。

(3) 指導と学習

「郷土芸術活動」教科の実施は、中学校第1学年で、毎週1時間の授業を原則とする。指導におけるその内容を構成する各領域の授業時間の配分は、郷土芸術活動の紹介が4～6時間、郷土造形活動が12～14時間、郷土芸能活動が12～14時間、郷土芸術の展示と公演は4～6時間である。しかし、各学校が、実際の需要を配慮し、隔週2時間で、あるいは集中講義の形で、授業時間を円滑に運用し、教科内容を確実に生かすことが望まれている。

また、必要に応じて「郷土芸術活動」教科は、「童軍教育」（ボーイ・スカウト、ガール・スカウト教育）、「輔導活動」（カウンセリング）、「団体活動」（クラブ活動）などの教科との連携の形で授業を進めることが強調されている。この教科の指導方法については、まず、学校側は、学校の設備と社会資源を充分応用し、地方の郷土芸術の特色と年中行事を取り入れて、ビデオ、スライド、複製品の鑑賞や参加、見学、展示、公演などの体験活動を円滑に組み合わせ、生徒の興味を引き出して授業活動を設計する。そして、教師側は、地方の特色、学校の資源、生徒の能力などの条件を併せて考え、最適な単元を決めるとともに、最新の情報、生活に応用できる資料などを補充資料として提供する。また、郷土芸術に関連する能力を持つ生徒にも課外時間を利用して、郷土芸術活動に参加させ、その才能を発揮するように励ます。

生徒側の学習には、訪問、調査、文字資料の収集などの方法を通して、地方の郷土芸術を認識することや、体験活動をしたあとの共同討論を通しての意見や心得の交流などの多元的、多様な方法を積極に取り入れることがねらいとされている⁽²⁴³⁾。

2. 郷土美術の内容

「郷土芸術活動」教科における郷土美術は、教科の三つの領域の一つである郷土造形芸術と密接に関連しているが、郷土芸術活動への認識と郷土芸能活動の二つの領域にも関わっている。その郷土美術の内容は、平面造形、立体造形、原住民造形芸術のジャンルの領域で構成されている「郷土造形活動」の内容である（表5-4参照）。平面造形は、民俗版画、廟宇の彩絵、民間の吉祥図画、伝統演劇の顔譜（歌仔戲、皮影戲、布袋戲、傀儡戲などの役者や人形の顔の造形）の四つの内容になっている。立体造形の内容は、古跡、廟宇建築、家具、花堤灯、凧、彫刻、草木編み、その他の捏麵人（小麦粉人形）、吹画糖人（飴細工）、交趾陶（中国の広東仏山に伝来した陶芸技法、寺廟建築の装飾に用いる）、郷土玩具、焼物、ガラス工芸・・・）で構成されている。そして、原住民造形芸術は、彫刻、器物、建築、紡績・編みを含む服飾の四種類の内容である。

いずれも、生活との関連性や、それぞれの図案、様式、色彩の象徴的意義や、制作過程、技法などについての紹介が主な指導とされている⁽²⁴⁴⁾。

⁽²⁴³⁾ 教育部前掲書、411-421頁

⁽²⁴⁴⁾ 同上、414-415頁

第3節 実施状況の現地調査

1. 調査の目的、方法、日程

1998年5月に実施した本調査は、各々の具体的事例に即してできるだけ実際の声を生かして、過去10ヶ月間の各教育機関の「郷土芸術活動」における郷土美術の実践実態を把握し、各校の実践が個別化している状況の下で、今後の台湾の郷土教育と郷土美術の在り方を検討するための基礎となる資料を提供するものである。したがって、今回の調査は、1997年の小学校を主とする「郷土教学活動」の現地調査より、調査範囲を台北地区から台湾の北部、東部、南部に拡大し、「郷土芸術活動」に関わっている代表的な事例を取り上げて、面接、見学によりインテンシブな情報収集を行う事例研究的調査手法を採用することにした。調査の日程は表5-5のとおりである。

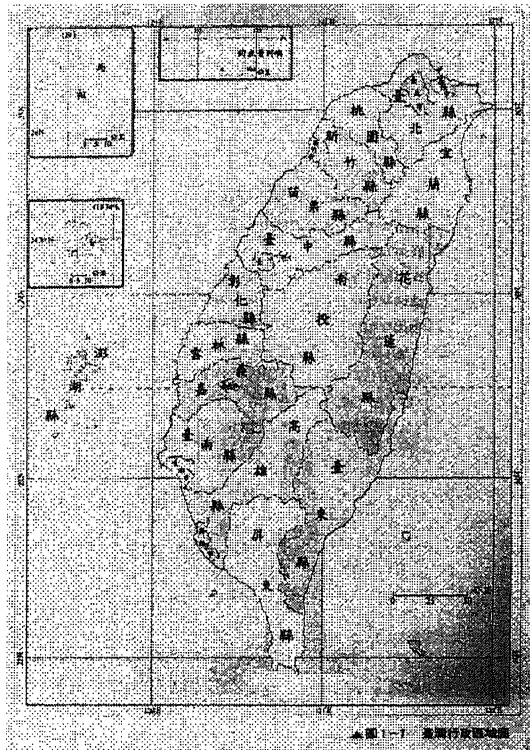
調査範囲の台湾は台湾本島、澎湖群島、金門、馬祖、南海諸島、近くの島々などを包括し、面積は約36,000km²で、日本の南西方の太平洋にある。台湾の人口は約2100万人であり、平埔族、高山族のさまざまな原住民族と中国大陸から移住してきた漢民族で構成される⁽²⁴⁵⁾。

台湾の北部、南部および都市地区は、中部、東部及び農村地区より人口の密度は高く、工業、商業が発達しているが、環境問題が深刻化している。かえて、中部、東部及び農村地区にも、人口の過疎化、高齢化、地方の建設が遅れている問題を抱えている。このような問題を如何に解決し、均衡に発展させることは、台湾が直面している最も重要な課題である⁽²⁴⁶⁾。

⁽²⁴⁵⁾ 国立編訳館『国民中学認識台湾 地理篇』、国立編訳館、1998年8月、4頁、48頁

⁽²⁴⁶⁾ 同上、103頁

図5-1 台湾の地図⁽²⁴⁷⁾



2. 調査の対象と内容

本調査の中心課題は、個々の対象者が「郷土芸術活動」に関して行っている仕事の状況を把握していくことである。

ここで強調したいのは、今回の調査は、学校現場を中心とし、台湾の北部、南部、東部のいくつかの学校を訪れ、授業の様子を観察し、子どもの感想を多く聴取し、まとめたものを主とした。また、国の教育研究機関や、国と地方の教育行政機関や、シンポジウムにおいてさまざまな関係者にもその観念、実践を伺った。

次に、具体的な調査内容と調査対象の機関の役割に分けて概観してみたい。

(1) 教育行政機関

国の教育の最高指導機関である教育部（日本の文部省に相当）をはじめ、地方の台北县政府教育局、高雄市政府教育局、高雄市政府原住民委員会、宜蘭县政府教育局を調査対象とする。各々に対して調べた内容は、小・中学校におけ

⁽²⁴⁷⁾ 国立編訳館前掲書、5頁

る郷土教育の実施に関する国や地方の政策と動向、郷土美術の実施に関わる教員の研修、及び教材の発行などである。

(2) 教育現場

今回の調査対象とした学校は、中学校の台北市立西松国民中学、台北市立龍山国民中学、台北県板橋市立重慶国民中学、台北県立鶯歌国民中学、高雄県立旗山国民中学、宜蘭県立復興国民中学、台北県文山私立中学校の7校と台北市立福林国民小学、合計8校である。

インタビューは、これらの学校の生徒を主とするが、校長、教務主任、教師にも行った。調査内容は、実施の方針、教師の分配、教材の開発、授業の様子・内容、授業時間の組み立て、生徒の反応、連携活動の実施状況、困難な点などである。

(3) シンポジウム

調査期間中に国立伝統芸術センターが主催した伝統芸術会議と国立台湾師範大学が主催した郷土芸術会議の二つのシンポジウムに参加した。前者の会議では、国の伝統芸術や郷土芸術の保存と伝承計画の実行を担当している国立芸術学院伝統芸術センター長である林保堯教授をはじめ、三日間にわたって、全ての講演を聞いた。また、台湾の屏東県立古樓国民小学、来義国民中学で、原住民の伝統工芸である紡績、編み、服飾を教えている許春美氏にその指導に関する諸問題を伺った。後者の会議では、まず、美術考古学の専門家である王哲雄教授に郷土美術教育の実施上の問題点を伺った。そして、上述の林保堯教授と同じく小・中学校郷土美術課程の編集に関わっている江韶瑩教授がこの2年間における学校現場での実践に関する諸問題をまとめた講演を聞いた。

(4) 社会教育機関

宜蘭県立文化センター戯劇館において、鄭英珠氏から戯劇館の所蔵品の紹介を通じて、台湾の郷土演劇である歌仔戲の発展の歴史的流れを語った。没落の危機に何回も直面した台湾の歌仔戲は、現在、その故郷である宜蘭における伝承と学術研究の確実な計画が整っていることにより、新しい命が与えられた。特に、小・中学校の歌仔戲部の成立や郷土教育課程の導入などの動きは、また、この郷土演劇に明るい未来を描き出している。

(5) 民間団体

国語日報の郷土資源センターは、今回の調査対象においての唯一の民間団体である。郷土教育の人材資源、文献資料を所有し、青少年を対象として、さまざまな形で郷土活動を推進しているこのセンターの設立目的、経営方針、経営内容、利用状況などについて調べた。

表5-5 調査日程と具体的内容

	訪問日	場 所	対 象
1	5月15日	伝統芸術会議	許春美
2	5月18日	高雄県立旗山国民中学	高宏上主任
3	5月18日	高雄市政府教育局	謝燕嬌、林美玲
4	5月18日	高雄市政府原住民委員会	潘春義主任秘書
5	5月19日	台北市立福林国民小学	吳隆榮校長
6	5月19日	教育部	宋之菡
7	5月19日	台北市立西松国民中学	林蓮珠秘書、生徒の王さん 崔さん、夏さん
8	5月20日	台北市立龍山国民中学	蘇萍校長、范築濤先生、一年 生
9	5月20日	国立師範大学の郷土芸術会議	王哲雄教授、江韶瑩教授
10	5月20日	国語日報郷土資源センター	郭菁恵
11	5月20日	電話訪問	台北県辞修中学一年生の親友 の子どもの羅さん
12	5月21日	台北県政府教育局	蕭金清
13	5月21日	台北県立鶯歌国民中学	張先生、教務主任
14	5月22日	宜蘭県立復興国民中学	一年生
15	5月22日	宜蘭県立文化センター戯劇館	鄭英珠
16	5月22日	宜蘭県政府教育局	文超順主任視学
17	5月22日	電話訪問	台北県板橋市立重慶国民中学 一年生の三人の生徒

第4節 調査過程

1. 調査段階 I

5月13日から10日間をかけた、5月22までの現地調査では、訪れた機関や対象がかなりの量になっているので、まず、教育行政機関、社会教育機関、シンポジウム、民間団体などについて述べる。

(1) 原住民服飾製作の指導者

国立伝統芸術センター主催、国立芸術学院企画の「87年度伝統芸術シンポジウム」は、5月14、15、16日の三日間、台北の中央図書館国際会議場で行われた。筆者は、企画担当の林保堯教授に招かれ、「日本における学校・家庭・コミュニティ間の提携から見る伝統芸術の保存と伝承」と題した研究を発表した。会議で知り合った許氏は原住民服装の製作工房を経営している、原住民編織を詳しくしている方であり、学校で実際の指導経験を持つ方である。その経験について、次のように述べている。

私は、原住民服飾工作店を経営しています。原住民服飾の新しいデザインの開発も試みています。これらのアイデアを生かして、原住民舞踊の服飾、文化園職員の制服、花蓮卓溪小学校、崙山小学校、来義中学校の制服をデザインしました。故郷屏東の古樓小学校と来義中学校で原住民編織工芸を教えたことがあります。花蓮の海星高校へ行って、「原住民の伝統工芸発展」について講演をしたこともあります。また、屏東師範学院の先生も日本の学者を連れてきて、現場で製作過程を見ていました。先生たちは来る前に、すでに関連資料を見たと言っていました。

学校でさまざまな編織技法を教えたことがあります。古樓小学校の場合は、43時間で十次繡の構図から作品完成まで教えました。この編織課程は現在も続けています。来義中学校の場合は、時間は少なくとも経費も不足し、機械を購入できませんでした。ですから、授業で、編織の技法を見せるだけ、生徒たちは実際に操作することはできませんでした。私の工作室で習った弟子たちは台湾服装デザイン、民族工芸奨、台中

文化センター編織工芸などのコンクールで良い成績を得ました。

(2) 高雄市の実施状況

高雄市の実施状況や教材の編集について高雄市教育局小学校業務を管轄する三科で小学校郷土教育業務担当の謝さんに聞いた結果を次のようにまとめる。

高雄市の郷土教材は『愛我高雄』と『郷土教材実察手冊』の2種類がある。その範囲は、第3学年は学区を中心とするもので、第4学年は行政区を中心とするものである。編集経費は教育部から3学年に対して20万元、第4学年に対して10万元の補助を受けた。印刷費は本局が負担した。高雄市の郷土教育は4年前から実施し始めたと同時に各学校の教材編集作業も進行してきた。各学校の教材編集は、最初の打ち合わせ会議から編成するまで約1年間がかかった。郷土資源センターは教育部からの80万元の補助金を受けて、莒光小学校の社会科研習センター内に設置されている。来月には、教育部は各県市の郷土教育の実施状況や成果を理解するための訪問視察を行う。

(3) 都会で暮らす原住民の話

高雄市政府原住民委員会の主任秘書 潘春義氏は、高雄市の原住民教育について、「今の段階は原住民母語教育の推進を重点としています。高雄市に在住する原住民の民族は阿美、排湾、魯凱、布農の順で占めているので、教材の編成はこの多様的特質を考えなければなりません。中・小学校を対象とする原住民母語教材の内容は、黥面（墨いれ）、百合勇士（部落の伝説）などを含めているものです。原住民は文字ないので、ローマ字を用いて漢字より簡単です。」と述べた。芸術教育については、大人を対象とする歌謡班と舞踊班が主要な業務で、よく文化交流の目的で海外訪問をすると強調した。

原住民芸術の話でインタビューの休止符を打ち、潘さんは「豊作舞」、「生の源」、「祖霊祭」、「狩猟の頌賛」、「農事舞」、「永遠のダンサー」などの原住民の彫塑作品が掲載されている『祖霊の語り』（『祖霊的細語』The Whispers of the Ancestral Souls）を贈呈した。

(4) 教育部に訪れる

教育部の郷土教育業務担当の宋之函^サさんに教育部の郷土教育実施計画と6月に行われる訪問視察計画の二つの資料を貰った。宋さんの話から、現在独立教科として実施されている郷土教育は、将来の発展として、各々の領域の教材を各関連教科に取り入れる可能性があることが伺えた。

(5) 郷土芸術の文化脈絡

国立台湾師範大学芸術学院主催の「98師大芸術節郷土芸術研讨会」（資料

5-7参照)が、5月20日の9:00~17:00、国立台湾師範大学教育大樓2階の講演ホールで開催された。開催目的は1.各領域の方々の郷土芸術教育に対する共通認識を求めること、2.学校、家庭、社会の教育活動を通しての着実な郷土芸術の進め方を探ること、3.郷土芸術と教育の未来の発展方向を論議すること、の三つである。これらの目的に基づく内容は、三つの講演、シンポジウム、会議特集の出版でなっている。参加者は、各大学の芸術と教育領域の研究者、大学院生、学部生、小・中学校現場で郷土芸術を教える教師、郷土芸術に興味を持つ社会人の方などであった。

筆者が聴講したのは、国立芸術学院伝統芸術研究所の江韶瑩教授の「郷土芸術の文化脈絡」(資料5-7参照)と題した第2講演である。この講演の内容を次のように要約する。

①中華伝統と郷土伝統

1997年、伝統芸術せんたーと教育部が共同で開催した「伝統芸術研究会」で江氏は凧(風箏)の例を通じて、郷土芸術教育の理論と実践について論じた。また、台北師範学院が主催した「伝統芸術教学研究会」で、江氏も伝統芸術と郷土芸術の理論と実践を構造を論じ、文化資源の利用について具対策を話した。今年、先週に開催された「兩岸伝統芸術交流研究会」で、両方の発表を聞いて、交流が断絶になっていたこの50年間、それぞれの伝統芸術や、民間芸術、郷土芸術に関する認識、伝承の方法は大きく異なっている。

現在のような郷土芸術教育の発展過程を見ると、民国81(1992年)年に教育部は民意にしたがって、この方面の課程を研究しはじめた。各県市もついで郷土教材の研究・開発を開始した。更に、小・中学校の正式課程に取り入れられ、5大領域で構成する。芸術の領域において、三つの重点を注意すべきである。一つ目は、歴史的伝統である。二つ目は、社会の状況である。つまり、各時代の社会背景の下に、芸術の相互的影響が生じることとその結果である。三つ目は、これらの重点を考え、教材を如何に選定し、伝授して解釈するかという学術研究の視点からの方法である。現在の生活と全然関わりのないものを教材とすれば、標本と同じように、その生命力は現われなくなり、社会文化と脱節する恐れがある。範囲を決めるときにも、中華文化の伝統と郷土的伝統の両方とも目を配る必要がある。この両者間の関連性を無視することはいけない。我々の芸術界の現況を見ると、伝統芸術や郷土芸術の伝承になかなか力を入れる暇はないと感じる。この課程を確実に実践するに芸術界、教育界、文化界の相互提携の共同意識を得なければならない。

②実践上の問題

中学校の郷土芸術課程が実施されてきて、いくつかの問題が生じた。一つは

教師のこの教科を教える能力が足りないことである。この問題の背後に、学校の行政にも関わりがある。それは、教師の担当教科を決めるとき、人気の教科、あるいは教え易い教科をねらう場合、「郷土芸術活動」も同時に担当するきまりが多く为学校に見られる。そして、芸術家を養成するという従来の観念が変わらなかったら、郷土芸術に目を配ることができるかどうかという問題も存在している。保護者の立場からもさまざまな声が聞こえる。例えば、この教科が増えて、子どもの負担になるかもしれないことや、教科の内容も高校の入学試験でテストするか。このようなさまざまな問題を抱えている我々は、この教科の実践の最適な方法を評価している。

③「郷土芸術」と「民族芸術」

「郷土芸術」この概念と「民族芸術」とどのような関わりがあるかについても考えなければならない。「民族芸術」この言葉は民国70年代、文化資産保存法が通った時とともに使われ始めた。実際面から「民族芸術」を見ると、教育部に属する事業の一部である「民族芸術」の保存に関する行政的施策がある。この「民族芸術」の範囲には、各民族の伝統芸術のほか、地方の特色を持つ芸術と民間芸術も含まれるものである。70年代以前、民族芸術は濃厚的な政治的色彩を持った。それは、文化復興運動という中国大陸の文化革命に対抗する文化政策が打ち出されたこととともに、「民族芸術」が頻繁に使われ始めた。この時期の「民族芸術」は中原文化（中国の漢文化）を意味していた。しかし、今日の民族芸術はすでに多元化、多様化されて、各民族の芸術や、台湾が独自で発展し形成してきた芸術も包括されている。独自性を持つ台湾の芸術を具体的な例で説明すると、例えば、明の時代、漢民族の移民はまだ少なかったころ、オランダ、スペインが台湾を経営したことがある。現在の台南安平の古い建築には、オランダ、スペインの影響を受けて、山 蓄に小さい裸体の天使の模様や建築の様式はまだ残っている。そして、原住民の工芸も台湾の工芸に影響した具体例がある。その一つは、竹編の技法の一種である螺卷の編方である。漢民族の竹編には、この技法は見られないが、台湾の工芸には、この編方が見られる。

④台湾文化の形成

台湾の文化に与えたもう一つの大きな影響は日本である。日本様式や西洋様式の芸術を台湾に導入するとともに、20年代においての多くの日本人学者が台湾でフィールド・ワークをして残した数少なくない文献は、今日の我々にとって台湾の歴史文化の発展を研究するで欠かせない貴重な資料になった。植民地時代の台湾は中国大陸との交流は続けていた。経済の安定的な時期にはいると、地震で倒れた廟や寺を修復ために中国大陸から多くの廟、寺建築職人、仏師を

招いて、これらの廟や寺を修復した。このような具体的成果は今もまだ見られる。終戦直後、国民政府と同時に台湾に来た第2次移民はまた中国の各地方の伝統芸術を伝えた。このように、歴史上の各時期に台湾が受けた文化的影響は大変異なっていることは明らかであり、これらの影響は今日の台湾文化を形成する要素である。

70年代、台湾に住んでいる人たちにこの土地に根ざす感情を呼びかける郷土文学論争が始まった。この郷土文学のブームは実は、20年代にもあった。しかし、質的には異なる。20年代の台湾郷土文学は植民地の統治者に対する抗議的、民族的感情を表わすものであると考えられる。しかし、70年代の台湾郷土文学論争は、台湾が囲まれる現実や環境を正直に見なければならぬ、「台湾」この土地にに対する親と子のような感情を持たなければならないという使命を負った。また、西洋と本土、中原と本地それぞれの関係をどのように適切化するかという論戦でもあった。この動きは、まず、政府による民衆の意識管制政策が緩和化され始めたと同時に、当時の若者の注意力も台湾郷土に向き始めて、研究の視点は台湾に置けられ、促進されることとなる。勿論、台湾文化に関する探究もその中の一環であり、関連する芸術活動や研究活動は今だに積極的に推進されている。林懷民の「雲門舞集」、「蘭陵劇坊」の試み、音楽家による民間音楽の採集、演劇学者邱申良の民間戯曲莊和による民間工芸の採集などの例はよく知られていて、今日の郷土芸術に積極的な影響を及ぼした。

当時、江氏もこれらの多くの研究者と同様にフィールド・ワークをし始めた。これらの研究者のねらいは、生きている民間の芸術様相や庶民社会の調査を通じて、台湾の伝統文化を再定義し、その価値を見い出そうとしたことである。さまざまな文化が台湾の社会に入り、同化されて台湾文化の基になった。ここで形成された台湾文化を考えると、江氏は「文化の在地化」を主張する。この主張の意味は、狭い国粋主義や激しい民族主義や台湾主義とは違って、すでに台湾の土地に根差した文化を台湾文化として見ることである。したがって、西洋と本地、伝統と現在を偏りのなく尊重することも示している。長年のフィールド・ワークを経て、我々は一つの事実を発見した。それは、生活と密着していた多くの台湾の伝統的芸術は消えたことである。その代わりに、年中行事（歳時）と宗教信仰と関わる祭祀的芸術はまだ盛んに行われている。この祭祀的芸術は現在の台湾伝統芸術の主流になった。

⑤大学の新しい動きと芸術家の新探索

このように、フィールド・ワークを通しての台湾郷土芸術研究は、学校の教育への影響だけではなく、大学の学院派芸術教育にも確実に影響を与えた。師範大学、台湾大学、文化大学、そして芸術学院などにおける台湾郷土芸術研究の専門領域の設立にともなって台湾郷土芸術風潮を起こした。80年代に入り、

台湾の経済は飛躍的に向上し始めた現象は、国民の芸術消費観念を喚起しながら、郷土芸術に生活との関わりを深めさせ、更に発展する空間を与えた。連带的に芸術家の創作理念も新しい要素を吸収し、新しい郷土的様式を絶えずに作り出した。朱銘の木彫は一つの例と考えられる。朱銘は、仏師について仏像の彫刻を習ったが、この初期の伝統的基礎に立ちながら、技法と理念の転換を求め、一連の台湾風、郷土味が溢れる木彫を作り出すことができた。国民は、芸術を消費する経済能力をもち、特に従来の西洋芸術とは異なる草の根の性格をもつ郷土芸術に対する好みは、今日変わりなく郷土芸術に安定な市場を提供している。上述の各種の動きは、実は、郷土芸術に伝統的土壌に生活と新しい関係を築き再生する栄養を与えたと考えられる。この社会現象の変革から学校の郷土芸術教育を考えれば、その確実的实践を求めることには、生活との関連性という要素は大切であり、この要素を適切に教えるべきである。以上をまとめてみると、未来の郷土教育の理論を構築するとき、歴史的伝統、社会の状況、文化の脈絡の三つの部分を同時に把握し、探究するべきである。子どもたちに有形的な様式や技法を学ばせると同時に、この郷土芸術の無形的・精神的価値を認識させなければならない。

(6) 国語日報新聞社の郷土資源センターへの見学

郷土資源センターの展示は、本を中心とするもので、地方が出版した郷土教科書（部分的）、教材と指導法、論文集、各出版社の出版物などが見られる。その類別を見れば、歴史、古蹟、民俗、物産、宗教、芸術、考古、文学、族群、言語、伝記など主なものである。

また、国語日報新聞社が主催する「郷土教育児童の夏キャンプ」の案内書も手に入った。生活常識、科学、芸術、数学、郷土、体育、語文、表現芸術の八つの領域に基づいて、台湾島の自然生態、竹箸と竹鉄砲作り、郷土遊び、台湾の原住民、輪ゴム遊び、飴作り、環境芸術探訪、原住民舞踊、民謡の話などの郷土的学習が設けられている。

(7) 台北県の実施状況

台北県の学校の郷土教育業務を担当する蕭金清さんは学校の先生から転勤してきた方であり、学校現場の業務を詳しく知っている。台北県の中学校「郷土芸術活動」の教科書については、県版の編集担当は、新莊中学校で発行し使われていると話した。実施の状況については、全面的に課程に取り入れられて教えていることである。

「小学校においては郷土教学活動を試行している学校は多くあるが、正式の実施も今年の9月からのことです。」と述べながら、一冊の県版の『郷土教学活動』を下さった。「授業の様子をビデオで記録した学校がありますか。」と

いう筆者の質問に対して、彼は「小学校は正式な実施に入っていません。そして、中学校は実施して一年になっていないので、皆はまださまざまな試みしていて、この種類のビデオはまだ作られていないでしょう。」と答えた。また、「教育部の訪問視察にどのような対応をする予定ですか。」という問いに対しては、「まだ考えているが、本県の中・小学校の郷土教材と教師研修の経過や研修内容、参加者などのデータを提出する予定です。」と答えた。学校独自の郷土教材開発の状況については、「全面的ではないが、学校や校区を中心とする独自の教材開発が進んでいる学校もあると聞きました。」と、そして、教師研修については、「各行政区に各教科の援助を担当する中心学校が設けられているので、これらの学校に各教科の郷土化に関する教師研究を任せるようなかたちで行われています。」と述べ、「特に熱心な地方の役場もあり、その力を借りて、これらの教師研修に大変貢献しています。例えば、土城市公所、三峽鎮公所は自発的に経費を提供し、教師を招いて、その管轄地の郷土教材を編集し、学校に提供します。また、自主的に教師研修も行います。」という特例も紹介した。筆者が去年、韓国で行われたアジア地区デザイン学会の論文集で鶯歌中学校の事例を見つけて、この学校を見学したいと願っていることを述べると、蕭先生から鶯歌中学校の教務処に勤めている丁組長を紹介された。

(8) 宜蘭県の郷土教科書

宜蘭県政府教育局の主任視学の文超順氏は宜蘭県の郷土教育推進計画の初期段階から主役を担ってきて、計画の発展について大変詳しい方である。

その訪問内容をまとめてみると、1.小学校の「郷土教学活動」は、今年の9月から全面実施になっている、2.中学校の郷土教材は、言語、歴史、地理、音楽がすでに発行されたが、美術の部分はまだ編集中である、3.各郷、鎮、市は各自の郷土教材をもっている、4.郷土課程の教師研修は各郷、鎮、市に依頼して行われている、5.学習評価の原則は、ペーパーテストをできるだけ避けるようにするなどのものである。

原住民芸術について、文先生は、原住民児童の多い学校がそれぞれの条件に基づいて発展すべきである。計画が確実に立てられれば、教育局が経費を補助するので、学校あるいは学校の所在地域にこの方面の専門人材資源があれば、推進しやすいと考えた。その実例としては、今の段階は、泰雅族の舞踊と藤編が最も成果がある。例えば、東澳小学校と南澳中学校においては、地域の人材資源を利用し、このような計画が進められていると文先生は説明した。

ちなみに、文先生の協力で、この年の7月、宜蘭県の12管轄地域（宜蘭市、羅東鎮、大同郷、員山郷、五結郷、南澳郷、冬山郷、蘇澳鎮、三星郷、礁溪郷、壯圍郷、頭城鎮）の小学校第3、4学年用「郷土教学活動」教科書合計39部を日本に届いた。

(9) 歌仔戲の里の見学

宜蘭県立文化センター戯劇館の鄭英珠さんに伺った結果を、次のように蘭陽歌劇団の設立経過、歌仔戲の歴史的発展の流れ、見に来ている二人の男子生徒へのインタビュー、2階の布袋戯館への見学の四つの項目でまとめられる。

①蘭陽歌劇団の設立経過

宜蘭は台湾の郷土演劇の歌仔戲の故郷である。近年、歌仔戲の伝承のため、一つの新しいタイプの劇団が設立された。鄭さんは、この蘭陽歌劇団の設立について次のように述べる。

蘭陽歌劇団の設立に、文化センターは大変力を入れました。その経過は、歌仔戲の元老の陳旺叢さんは歌仔戲の伝承が危機的状態になったことを感じて、文化センターに蘭陽歌劇団の設立案を提出しました。この案は認められて、団員の公開募集をして、正式に成立しました。民国84年（1995年）から現在まで、ほとんどの団員は異動していません。毎回の練習では年配の先生が約6、7名指導に来ています。団員や先生両方とも無給で稽古をしています。団員のほとんどは職業をもっていて、毎週二日、夜を利用して、先生たちに習います。公演する時の必要な経費だけは公の機関に申請します。職業劇団ではないから、廟の祭で演じる時に賞金が貰えます。賛助の気持ちで廟の祭に参加することは我々の趣旨です。廟の関係者に報酬のために参加にする悪いイメージを与えたくありません。

②歌仔戲の歴史的発展の流れ

この展示の戯服は陳先生と 先生が寄付したものです。早期の本地歌仔はとても草根性を持っていて、服装はほとんど当時の日常生活の服装と同じものでした。この本地歌仔戲は、他の劇種の影響を受けて、隈取りの方法、様式を吸収し、更に鑼、鼓の楽器も取り入れて使われている、歌仔は歌を中心とする劇ですが、本地歌仔戲の団員は一旦職業劇団に入ると、歌を歌うことが少なくなって、かわりに、台詞を話すことが増えてきた。また、戦闘的動作もよく見られる。これは、恋愛劇の多い歌仔に比べて、大きく違います。

これは賞金の紅紙です。この賞金は、演じる途中で舞台に張り出すことがほとんどです。観客のご好意によって、金額は違います。更に、金メダルを贈ることもよくあります。私たちが金メダルをもらったことがあります。とても嬉しかったよ。これらの歌仔戯服は本地の萬川歌仔戲団が解散するときに戯劇館に寄付してくださったものです。内台歌仔戲にゆいて話しましょう。日本の植民地時代、ある時期、内台歌仔戲はとても盛んになっていました。例えば、有名な拱楽社はそうでした。歌仔戲の名優の許秀年の出身はこの拱楽社です。こ

れは、内台歌仔戲のポスターです。

筆者が「私は昔、このようなポスターをよく見たことがあります。とても懐かしいものですね。」と言うと、鄭さんは、「信じられないことですね。私は外で、まだ見たことはありませんよ」とびっくりした表情で疑いました。「萬華は台北の古い町で有名なところですよ。あの有名な龍山寺の近くに萬華戲院に内台歌仔戲の公演がよく行われました。あの萬華戲院の前を通ると、いつもこのような華やかなポスターが飾っていました。」と筆者が答えた。

このコーナーの展示品は、私たちが集めたレコードとカセットテープです。収集品の中には、78回転のレコードがあるので、それを聞くために、わざわざこの機械を購入しました。これは、名優の楊麗花さんが寄付した5セットの戯服です。葉青さんも2セット寄付しました。研究者のために、演劇と直接関係するものだけでなく、演劇と間接的に関わりのあるものも収集の対象となっています。例えば、歌仔戲部を持つ吳沙国民中学、吳沙国民小学などの学校は、その活動に関連する資料もまとめて提供しています。また、県史館の収蔵品にも戯劇類があります。

③見に来ている二人の男子生徒へのインタビュー

二人の男子生徒が展示を見ていることを発見した筆者は、すぐその場でインタビューをする。「お二人は、歌仔戲を見たことがありますか。」という筆者の問いに対して、二人の男の子は、「あります。しかし、現在機会は少なくなりました」と答えた。「どこで見ましたか。テレビ、野台の公演、あるいは内台。どっち」問いに対しては、「野台だった。廟の祭で野台歌仔戲を見た。」と答えた。「演出内容はどの種類のものが好きですか。」を聞くと、「格闘的、動きの速いものが好きだ。」と答えた。

④布袋戲館への見学

2階は布袋戲館です。見に行きましょう。ここの展示は、鐘任壁さんの協力で出来たものです。鐘さんは宜蘭の小学校と中学校で布袋戲部を教えています。鐘さんの人形のほか、中国の漳州、泉州の人形やプラスチックの人形など種類がたくさんあります。ここで、実演できるように、戲台も揃っています。ショーケース一つ一つの違う物語で配置しています。これらの造形は、全て私たちの手作りものですよ。孫悟空が雲に乗って空を飛ぶ様子を現わすため、綿で雲の形を作りました。この綿は私の家にある使っていない枕の綿を利用したものです。皆協力して楽しく作った成果とも言えます。このコーナーは幼稚園の子どもにとってとても魅力のあるコーナーです。幼稚園の先生は、大体園で西遊記の物語を話したことがあるので、子どもたちがここに展示しているものを見ると、すぐ共感が出ます。これは昔の六角型の戲台です。外に置いているのは

現代的戲台です。また、金光戲用の戲台もあります。そして、もっと古いの四角型戲台は、この時点の収集対象になっています。

最後に筆者は、「今日、この珍しい機会を下さいまして、どうもありがとうございました。また、さきほど、二人の男子生徒へのインタビューができて、もっとうれしかったです。」とお礼をした。

2. 調査段階Ⅱ

調査段階Ⅱは学校現場にかかわる内容に焦点を合わせ、その中から六つの事例と一つの授業実例を取り上げて述べたい。

今回の調査対象になった学校は、中学校の台北市立西松国民中学、台北市立龍山国民中学、台北県板橋市立重慶国民中学、台北県立鶯歌国民中学、高雄県立旗山国民中学、宜蘭県立復興国民中学、台北県私立辞修中学、そして、小学校の台北市立福林国民小学の、合計8校である。これらの学校は、台湾の東部、北部、南部に所在する。

(1) 高雄県立旗山国民中学への調査

最初訪れたのは、高雄県立旗山国民中学である。旗山は、台湾の南にあり、バナナの産地と各種の古い様式の建物で知られている町である。旗山国民中学は、旗山で初めて作られた中学校であり、36年の歴史を持つ。現在、普通学級23クラス、特殊学級3クラス、美術専門学級3クラス、そして、特別技芸学級1クラスという規模である。

訓導主任の高宏上氏は、旗山国民中学の郷土美術教育の実施状況について、「私は、教務の仕事内容はそんなに詳しくはないが、できる限り話します。まず、本校のホーム・ページをご覧ください。これは、教師たちと卒業したOBたちが協力して作ったものです。郷土美術の資料もいっぱい取り入れられています。例えば、旗山の建物や、隣の町、美濃の窯業はよく知られていて、その関連資料もこのホーム・ページに取り入れられています。郷土美術の学習については、本校には、二つのコンピュータ教室があるので、子どもたちが普段、授業でコンピュータを利用して調べることもできます。そして、「郷土芸術活動」授業の実施状況については、教材は、高雄県政府教育局の『郷土芸術活動』教科書を採用しているが、担当の先生個人が作った補充資料も重要な一部である。県の教科書が県の全般を範囲としているから、各々の町に関わる資料が足りないという欠点もあります。ですから、教師たちが皆補充教材を作ります。地元の民間団体である「蕉城雑誌」もたくさんの関連資料を提供してくれます。」

と述べた。

そして、「校長は、現在、研修のために日本にいます。校務は、ほとんど教務主任の林が代理しています。先生が日本に帰ったら、校長と連絡を取りませんか。校長はとても熱心な人ですので、きっといろいろ教えてもらえると思います。」と、高宏上主任が補充説明をした。

5月下旬、筆者は日本に戻って、すぐ福岡の西南学院大学学術研究所に研修している蔡正松校長に手紙を出して、間もなく、返事の手紙が届いてきた。旗山国民中学を研究対象としたい筆者の意向を分かって下さった蔡校長は、校長代理の林教務主任への紹介状も一緒に書いて下さったのである。

蔡校長は、手紙で、旗山中学校における近年の郷土教育の実施状況について、次のように述べている。

「85年度以前の郷土教育は、正式な課程に取り入れられていなかったし、経費と教師などの資源も欠いていたので、ただ部活の時間（特定の部以外、週2時間の集まり）で重点的に実施された。主な項目は、糸竹楽、獅子舞、母語学習、印石、書法、捏麵人、太極拳、郷土尋根活動、陶芸などです。それから、本校は、高雄県政府に頼まれて、高雄県の〔郷土芸術活動〕教科書の編集をした。また、何人かの教師も旗山鎮誌の編集に取り組んでいます。しかし、美術の授業には、わざわざ郷土学習を取り入れてはしなかったが、郷土への愛を表わすため、〔画我旗山〕シリーズで旗山鎮の〔新春美展〕に参加しました。つづいて、86年度、新しい課程標準にしたがって、〔郷土芸術活動〕を実施し始めたが、私は日本にいるから、実施の状況はまだ把握できていません。」

その上、蔡校長もこの一年間の日本での研修の心得を「日本に着いて間もなく、福岡の修猷館高等学校の運動会を見学したことがあります。組み立て体操、騎馬戦、綱引き、大回転などほとんど日本の伝統競技、そして、応援での団体の民族舞踊を見て、大変感動しました。その後、西南学院大学で柳田国男の民俗学とほかの日本民俗に関する授業を聞いて、更に、異邦の日本が、郷土教育⁽²⁴⁸⁾にこのように力を入れていることは、我々の学ぶところです。替えて見れば、台湾の多くの廟の建築は、美的、芸術的に感じる事ができなくて、観客の感動を引き起こさせません。その原因は、学校教育が確実に郷土と結び付いていない、つまり、建築家や芸術家も郷土美術に力を入れていないからでしょう。」と述べた。

(2) 台北市立西松国民中学校への調査

西松高級中学は、去年設立されたばかりで、中学校と高校が一つになってい

⁽²⁴⁸⁾ ここでいう郷土教育は台湾の学校教育における郷土教育の視点に立って考えたものである。

る「完全中学」という新制高校である。台北市が出版した『郷土芸術活動』をいただいた筆者は、校長の秘書の林さんを通じて、中学校一年生である王さん、催さん、夏さんの3人に「郷土芸術活動」授業の様子や、自分の感想についてインタビューを行った。

授業担当の先生については、「今まで同じクラスで美術の先生、音楽の先生、国語の先生、そして、図書室の先生が、一人で何週間かの授業をしました。つまり、教科書の中で先生の専門と関わる部分を担任する先生が異なりました。」に話した。教材については、「教科書のほかにもスライド、ビデオ、CD、カセット・テープ、プリントなどが使われています。」と答えて、各々の先生の授業や、宿題の具体内容を次のように述べた。「私たちは、図書室の許先生が獅舞、龍舞を教えていたときに、獅子のお面を作ったんです。見本を見たが、一応、自由表現の形で作って、学校で完成できない人は、家に持って帰って、完成するまでがんばりました。また、原住民の各族についても教わりました。あとき、私は、インタ・ネットを利用してレポートを書いたことを覚えています。美術の蕭先生は、原住民や、台湾の年中行事、民俗祭典を教えた。そして、台北市の古い街や、遺跡の分布図を黒板に描きました。蕭先生は折り紙の業は優れているので、皆に折り紙で蓮の花を教えていました。音楽の苑先生は、原住民歌の和声、輪唱などの特色を紹介しながら、アトランタオリンピックのテーマ・ソングを歌った原住民夫婦のCDも聞かせて、写真も見せました。また、ほかの台湾民謡もたくさん聞かせて、その中の一曲である〔青蚵糝〕も教わりました。あとき、私たちは、レポートを書くために、図書館や家で南管、北管、原住民、歌仔戲などの資料や、写真を一生懸命探して、忙しかったんです。国語の先生は、漢民族や、原住民の冠婚葬祭の儀礼について、細かいところまで面白く語りました。皆聞きながらノートを取りました。私は特に葬儀の内容に興味深く聞きました。」

筆者が、「この教科について、面白く感じたのは何ですか。」と三人に聞くと、「スライドがよくつかわれる、CDをよく聞かせる、冠婚葬祭の儀礼に関する意味や、伝説が面白い、ノートを取るのはとても緊張しますが、・・・」と早口でしゃべった。そのうち、催さんが、一人で「もし、休日に現地での見学や体験学習ができれば、いいなー。」とつぶやいた。筆者が、皆は行きたいところ、見たいことを聞くと、思わずに、三人の生徒は、原住民の生活を体験したいと一斉に答えた。石板屋を住みたい、排湾族のマークである「百歩蛇」がついている器物が見たい、原住民のぶらんこを体験したいなどのそれぞれの理由を聞くと、「原住民の生活習慣は、私たちとかなり異なっています。また、教科書に取り入れている歴史事件や、遺跡や、昔のことなどに比べれば、原住民の生活は、現地に行ったら体験できるし、私たちの好奇心を引き出しやすいです。」と三人が互いに負けずに相次いで答えを出した。

(3) 宜蘭県立復興国民中学への調査

宜蘭県立文化センターの広場で、運動会のダンスを練習している隣の復興国民中学の子どもたちに出会って、すぐその場で即席インタビューを行った。まず、「郷土芸術活動」の担任の教師や、授業内容については、「この教科の担任の先生は、一クラスで一人しかいません。先生の専門は書法、歴史、地理、国語などです。授業のかたちは、見学、カセットテープを聞くこと、ビデオを見ること、実物を見ることなどがあります。授業で、宜蘭の歴史、故宮博物院、台湾の焼き物などの知識を学んだし、こまや竹とんぼも作ったし、中国音楽や台湾の歌謡、主に童謡をよく歌った。そのほかにも、日本の歌を歌ったことがある。ある原住民の少女のことを描いた歌ですが、名前のはっきり覚えていませんが、なににの鐘らしいです」。「サヨンの鐘」ですかと筆者が試しに聞くと、はいと答えた。この歌まで教えることについて、筆者は、少し違和感を感じる。

また、「ほかの教科に比べて、とても生活に密着していると感じました」、「ワーク・シートも使っています」、「楽しくて全然負担のない教科です」
「この教科は将来も続けて存在してほしい」などの声も出た。

実は、宜蘭県の実地環境教育と結び付く学校郷土教育の実施は、台湾でよく知られている。台湾大学大学院建築、城郷研究科の「2001新蘭陽計画」や、淡江大学の建築系の学校環境計画、日本やシンカポールの専門グループによる都市計画などのいくつかの計画を見れば、地方の美的環境を作り出すとともに、塀のない、地方の伝統建築の特色をうまく生かした、ゆとりのある空間で注目されている学校の美的環境の整備が重要な一環として具体的な成果が挙げられた。学校郷土教育のハード・ウェアであると考えられるこの伝統文化の特色が満たされる学校の美的環境の整備とそれに伴うソフト・ウェアの一部である小・中学校合計66校が関わっている「芸術薪伝教育」計画の実施は、すでに1993年に展開された。その中では、陶芸、凧、こま、泰雅族原住民の藤編み、紡績、染め編みなどの郷土美術の項目も含まれている。近年、小・中学校新課程における郷土教育の実施に伴う、郷土美術の学習は、各学校が独自で開発したカリキュラムに着実された。

(4) 台北市立龍山国民中学の「龍山寺巡礼」

龍山国民中学の所在地である萬華の歴史的背景を見ると、次のような特色がある。

古代、台北は湖だったが、長年にわたる土砂の堆積で盆地になり、やがてその湿地に、土著の平埔族が住むようになった。明、清朝時期、中国の南部沿海地方の移民が増え始めた。1709年に中国大陸の福建省泉州府の陳頼章らが開墾を申請し、大坵蚋（現在の台北の中心区）に入り、本格的な移住を始めた。

そして、次第に発展し、台北で最も古い街「艋舺」（バンカと読む、現在の萬華区）が形成された。19世紀初頭、萬華は台南、鹿港と並んで、台湾の三大都市の一つに数えられ、台北市の発祥地になった。

この台北市の最も古い街「艋舺」にある龍山国民中学は、約20年前に設立され、萬華区の豊かな伝統文化の資源に恵まれて、郷土芸術の体験学習を実施するには、ほかの行政区の学校より良い条件を持っていると考えられる。この特色について、その学校の案内にも、「本校は、約25970平方メートルを占め、人文精華の集中地で、交通の便利な萬華区にある。この地域は、繁栄的であり、素朴的な民風を有し、風土に恵まれ、傑出な人材が多く出ている。特に、龍山寺は本校の近くにあるため、『伴古寺、聆晨鐘』、古聖先哲の徳業を偲ばれ、人材の育成と国家の復興に良い条件が与えられる。・・・」のように書いている。

筆者が、去年の8月に行った現地調査も、この龍山国民中学を調査対象の一つとして取り入れた。そのとき、新しい課程標準を実施する直前の台北市の中学校の動き、特に、「郷土芸術活動」、「認識台湾」、そして、全ての教科に関わっている郷土教材の導入について、台北市の中学校郷土教科書『悠遊台北』の編集リーダである校長の蘇先生に非常に貴重な話と文献資料をいただいた。今回、再び蘇校長先生に依頼して、「郷土芸術活動」授業の様子（資料6-13参照）を見学させた。

5月20日午前9時頃の出発する前、生徒全員が学校の正門前で集合し、先生によるワークシートの書き方についての説明を聞いた。校長先生もその場で筆者を紹介し、同行することを生徒たちに知らせた。

目的地の龍山寺は、学校から徒歩で約10分の距離にあり、毎日大勢の人が祈願や参観に来る有名な古寺であり、その母寺は中国の福建省にある。入り口には大きな牌楼（山門）がある。牌楼に入ると正門と辺門がいくつかある。普段、出入りは両側の辺門を利用する。正門前には、二本の大きな柱があり、「龍柱」と言われるが、「その作り方は石彫、木彫などいろいろありますが、この二本の龍柱は台湾の唯一の銅鑄の龍柱です。」と先生が聞いた。左の門は青龍門で、右の方は白虎門で定めていて、総じて「龍虎門」と称じられる。

正門前の広場の両脇に噴水があり、先生はまず寺や廟に噴水を作る目的について説明した。そして、建物の「台基」について、「台湾の廟や寺はほとんど台基が見られます。その目的は大雨で増水の際の防水設備です。中国も同じように台基が見られますが、南地方は雨量が多いので台基の高さは北地方より高い」と解釈した。また門と窓を強化する「抱鼓石」、よく見られる吉祥を象徴する龍の図案の紹介を聞いて、皆は右側の門の前に集まり、柱の「柱珠」を見る。「柱珠は、柱の支える力を強める装置であり、このような取り付けは伝統的建築技法の一種です。」という説明を聞きながら、厳粛な気持ちで中に入

る。

寺の中は多くの部屋があり、一つ一つの使用目的は違う。観音は寺の主要な位を持っているが、ほかにもたくさんの仏像、神像が祭られている。清の乾隆期にすでに基礎が作られたが、ある年、大地震が起き、多くの仏像や神像が被害を受けた。観音像はなにも影響されなかったことは民衆の観音信仰に強く影響した。第2次世界大戦のとき、大勢の人がここに避難に来たと聞いた。中庭から屋根を見ると、三段重ねるの構造をもつ屋根の巨大華麗な氣勢が感じられる。先生は、屋根に装飾されている多くの「交趾陶」を指して、皆の注意を集め、「一つ一つの形は違います。普通、職人さんは10年、20年以上の磨きを経てから良い作品を作り出される熟練な技法を身に付けられます。」といった、「交趾陶」作りの難しさを話した。

話を聞いた後、屋根の真ん中に立っている七層塔へ皆の目が移った。「正統の仏寺は福、禄、寿三星を使わず、このような仏塔を置きます。」ということが屋根に塔を立てる理由が分かった。中庭の中央に置かれている三人の力士に支えられる可愛い造形をもつ「天公炉」も、中国の寺や廟には欠かせない重要なものである。それは、「玉皇大帝」を祭るために焚いた香を立てる機能をもつ。中庭の見学を終えて、皆後殿へ移動していく。後殿にもいくつもの部屋がわかれ、各々ことなる神像を祭っている。「龍山寺は元来は仏寺であったが、日本の植民地時代、日本人が台湾の伝統的宗教に対してさまざまな制限を設けました。その影響で、多くの神像は居場所が無くなってしまって、龍山寺に置かれました。これらの捨てられた神像は後殿に収容されて、龍山寺も純粹の仏寺から現在のように仏教、道教両方の宗教性格を持つ寺になりました。このような縁故で、以前、有名な民俗専門家の林衡道先生は龍山寺を神の雑貨屋と比喻する笑い話もありました。」と先生は龍山寺の特殊的性格について説いた。

「註生娘娘」や「三官大帝」など後殿に祭られている神像や後殿の光景を見た後、大殿とその周りの灯籠や柱、寄付者の名前を刻まれている壁面なども見た。「大きな寺や廟は、このような前殿、大殿、後殿の施設が整っているが、小型の寺や廟は持っていません。」と先生が述べた。次のものは見学途中で生徒にインタビューした内容である。

――一年生の授業には「郷土芸術活動」が全面的に取り入れられていますか。

はい。

――授業で、先生は教科書以外、何を使いましたか。

写真やビデオ、特にビデオはよく使います。

――今日のような授業について、感想を聞かせてくださいませんか。

たくさんの貴重な知識を学びました。

――今回の活動は遠足とどう違いますか。

遠足は遊び心で行きますが、今回は授業のための見学だから、心境的違います。

遠足に比べて、今回の見学は厳粛ような感じがします。

ーワークシートを書くことは、重荷になっていますか。

全然、とても楽しく書いています。（教室内の授業ではないので、とても楽しいとある生徒は補充説明をした）

ーほかのクラスではこの授業の担当の先生はどの教科の先生ですか。

歴史と地理の先生が最も多いです。

ーほかの教科にはワークシートを使用する教科はありますか。

いいえ、ありません。ただこの教科しか使っていません。

(5) 台北県立鶯歌国民中学への調査

台北県教育局の蕭先生の紹介を得て、陶芸の発展過程の詳しい教務主任、歴史担当の張先生、そして、「交趾陶」専門家の呉良彬氏に鶯歌国民中学の陶芸の発展過程、郷土芸術活動の実施状況についての話を伺えた。

①陶芸工場への見学

陶芸工場を見学したい意向を張先生に伝え、場所を教えてもらった。学校の一隅にある学校の付属施設の陶芸工場に入ると、17、18歳の男子が一人いた。話を聞くと、この学校の卒業生で、現在この工場で助手をしていることが分かった。どうして、陶芸の仕事に興味を持ったのかを聞くと、最初は好奇心でやり始めたと答えた。二人で話している途端、もう一人同じ位年齢の男子が入ってきた。この方は、この工場の主宰である呉さんの息子さんである。彼もお父さんの仕事を手つだっている。陶芸に従事する動機について、幼い頃から毎日親の仕事を見てきて、自分も実際にやってみようの気持ちで陶芸を開始したらしい。しかし、陶芸は実際に行くと、想像より難しいものであると彼は本音を筆者に聞かせた。彼自身が昼も夜も休まず作ったいくつもの「交趾陶」の作品が取引先に返品されたときに受けたショックとお父さんが彼のこれらの作品を見て、何も言わずに全部ごみ箱に捨てられたときの辛さなど、彼は陶芸についての思い出を話した。現在の彼は、彼の作品が次第に認められたことにより自信をもって陶芸の道を歩んでいる。二人の話しが終ったとき、工場のリーダーの呉さんが現われた。

②「交趾陶」の専門家と陶芸教育

呉良彬さんは鶯歌にある陶磁器屋で生まれ、「交趾陶」の専門家として知られている。幼いときから祖父や父親の陶器作りを見てきて、陶芸の基本技法も学んだ。17、18歳頃、彫塑方面の才能が著しく現われて、彫刻と塑造の技法

を重んずる「交趾陶」に専念してきた。長年の模索を経て、創作の道が落ち着く、作品も認められたとき、教育との関わりのある仕事を考え始めた。そのとき、この学校が陶芸工場をもっていることを思い出して、工場の設備を有効に利用して自分の得意な技術を生かし、子どもたちに意義のある陶芸を習わせようと考えた。「陶芸技法の歴史的流れについて詳しく経験してきた私は、子どもたちに教えることが多くあります。」と語る呉さんは、素焼、上り窯、焚き窯、重油窯、ガス窯、電気窯などの焼成技術の発展の流れを筆者に教えた。

当時の義務教育を済んだ青少年たちの多くは、兵役を待つ間の時間を良く無駄に費していた。もし、これらの青少年たちに陶芸の技術を身につけさせたら、彼らの生活は少しでも充実したものになるであろうと思った彼は、自分の意向を歴史担当の張先生に表明して、校長先生に伝えてもらった。それから、6年を経て、現在に至った。この6年間、陶芸技法をうまく用いて、実績を作り出した生徒は少なくなく、陶芸を特殊専門として、推薦され、職業高校に入った生徒も数多くいる。呉さんは、「地元生まれの私は、故郷の若者に郷土の代表的工芸を伝承することが私の使命であると思います。」を繰り返して強調する。現在、彼は、当地の職業高校でも専門技術者として、生徒たちに陶芸を教えている。

③学校の陶芸教育発展史

鶯歌国民中学の陶芸教育の発展過程に詳しい鄭主任が戻ってきたことに気付いて、すぐインタビューを行った。「この課程は美術と密接な関わりがあるが、本校の美術専門の先生は不足しているので、この課程に興味を持つ二人の地理の先生に任せて、ほかの何人かの先生と組んでチームを作りました。「教科書の教材について何か困ることありませんか。」という筆者の問いに対して、彼は、「地理の先生の一人はよく海外旅行をしますので、郷土に興味と専門知識両方とも持っています。この先生の力を借りて、問題がよく解決されます。」と答えた。

筆者は、「私が訪問したいいくつかの学校の先生から、教科書に対して、郷土の範囲を県に定めて、学校の所在地に関する資料の取り入れは大変少なく、指導に困難が生じるとの意見があります。この点について、貴校はどのように対応していますか。」を聞くと、彼は、「本校にとって、これは問題になりません。つまり、本校の施設には、陶磁工場、美術教室があります。それぞれ、専門の先生が配置していて、よく活用しています。郷土芸術と関わる活動もよく企画します。そして、外部の工場とも協力関係を結んでいて、実習の場が確保されています。また、鶯歌地区の郷土教材の編纂は、本校が担当していますので、関係資料は、大変入手しやすい条件があります。もっと具体的に言えば、本校は、陶磁器生産地区に所在する条件に恵まれて、郷土の芸術を学習すると

き、先生はすぐ生徒を連れて、現場見学に行くことができます。ですから、郷土芸術の授業は行われ易いです。勿論、極端に言う場合、例えば、三義の有名な木彫を習うとき、三義のような条件は持っていないから、効果は少し低下するかもしれません。しかし、鶯歌地区の郷土教材について詳しく把握できる学校を考えると、本校以外比べられる学校はないと思います。」と答えた。

筆者は、「先ほど、教学組長からも聞きました。鄭主任はこの学校に勤めて30年以上の経歴を持っていらっしゃいます。貴校の陶芸教育の発展過程について、簡単にご紹介いただけませんか。」に頼むと、彼は、「約20年前、この地区に陶芸発展センターが設立されたとき、本校も教室や窯などの陶芸の設備が整備され始めました。のちに、教育庁にも地方の特色や伝統を生かして発揮するように命じられて、陶芸の窯を重油からガスに換えて、教師を中心とした研究をしてきました。更に陶磁器工場も設立されて、陶芸専門家を招いて、工場の業務を担当しています。陶磁器工場の場合は、本校の生徒以外にも社会人向けのコースが常設されています。陶芸教室の場合は、張先生が長年の研究を重ねてきて、現在、主な指導を担当しています。生徒以外も、先生たちがよく課外の時間を用いて、陶芸を楽しくやっています。先生たちに比べて、生徒たちの方はかえって、興味が少ないと見られます。その理由は、多くの生徒の家は陶磁器工場ですので、陶芸は彼らにとって新鮮なものではないのでしょう。本校では、この特殊な背景に恵まれて、子どもたちはさまざまなレベルの陶芸コンクールに参加して、いつも大きな賞をもらいます。」とその陶芸教育の発展課程を詳しく説明した。

また、「20年前の重油窯を使った陶芸教室の時代も子どもたちが指導の主な対象でしたか。」の筆者の問いに対して、彼は次のように答えた。

「いいえ、あの時代は社会人が主な対象でした。現在陶磁器工場を経営している生徒たちの親は、当時の学習者の多くを占めています。勿論、選択科目の陶芸をとった生徒たちもいましたが、人数は少なかったし、作品も現在の生徒の作品のレベルにならないものでした。20年前のこの地区の陶磁器業は、現在のように確実な計画を立てて発展することとは違って、発注があったら、それに応じて作るかたちでした。現在は、土曜、日曜いつも大勢の人が集まり、各種の体験コースに参加します。このような楽しい遊びとしての陶芸はあのころにはなかったです。この地区が陶磁器の町になった主な条件は、近くに陶磁器を焼成する何種類かの原料土があるからです。これらの土を使って、日常生活に必要な食器を作ることが当時の主要な事業でした。この町が現在のような明るい様子になったのは、実は3、4年前のことでした。昔は道路は狭くて、店の照明も悪く、全体を見ると暗いイメージがありました。また、最近、幸いに鶯歌職業高等学校が創立されました。この高校には、陶磁工程科が設けられて、本校で陶芸に興味を持った生徒の進路や、この地方の陶芸の発展に大変役に立

ちます。」

④豊かな経験の積み上げ

「貴校は、実は郷土芸術活動に取り組んだの学習は、すでに長い歴史を経て、豊かな経験を積み上げました。この経験を生かして、中学校の郷土芸術活動を実施してきて、問題はないと考えますね。」と筆者が彼に聞くと、彼は、「勿論、全く問題はないとは言えません。例えば、担任の先生にとって、この郷土芸術の郷土の範囲を鶯歌地区、あるいは台北県に設定すれば、全然問題なしですが、もし、全国レベルに拡大する場合は、詳しくない地区の郷土芸術を教えるために、事前の準備は大変です。ですから、われわれの主張は、郷土の範囲を学校所在地あるいは所在県に定めるものです。」と答え、インタビューを終了した。

(6) 台北県立重慶国民中学への調査

親戚の子どもを通じて、3名の女子生徒を紹介してもらった。そのうちの一人は普通学級の何さんであり、ほかの二人は音楽特別学級の張さんと鄭さんである。電話インタビューをして、次のような「郷土芸術活動」授業の様子が分かった。

①普通学級の授業様子

生徒の何さんが述べた普通学級の「郷土芸術活動」授業は、40歳位の女性歴史専門の教師が担当している。ほかには、家庭科やボーイ・スカウト（童軍）科や、カウンセリング科の先生が担当するクラスもある。授業で、学習シートは使われていなく、先生が収集した台湾の郷土歌のテープが用いられている。教師は、教科書の学習単元の順に沿って、教えられているが、学習伝統行事や民俗が、伝統演劇より多く教えられている。しかし、最近、「布袋戯」の単元に入って、一つの課題が与えられた。それは、「布袋戯」の実演を体験するため、グループで、脚本から舞台上で演じることまで互いに協力しあって進んでいることである。

以上の授業の様子を考えて見ると、授業の形式は、実体験と単純に知識の伝授の二つに分けることができる。しかし、ほかの学級では、生徒に自習させるものや教室の外で遊ばせるものもあると何さんが指摘した。

「郷土芸術活動」授業がほかの教科に比べて、どのような特別な印象が残っているかについては、何さんは三つのことを指摘した。まず、生徒たちは、この授業を通じて、台湾の年中行事や、昔から伝わってきた暮らしの中にある風俗習慣、例えば冠婚葬祭などの儀式の内容と意味について、深く理解できる。そして、先生が、前述のことに関する自分自身の過去の経験をよく語って、そ

れを聞いた生徒たちにも強い印象を与えて、発言の意欲を高めた。また、普段の授業では、男子生徒は、伝統行事や、民俗に興味なく、自分のことばかりしている様子がよく見られるが、「顔譜」の単元で、それぞれの顔譜の色と代表する役との関わりが論じられたとき、これらの男子生徒が、想像できないほど熱心に発言し、興味深く討論したこともあった。

②音楽学級の「郷土芸術活動」授業

音楽特別学級の生徒である張さんと鄭さんによると、「郷土芸術活動」授業は、時間割では週に1時間と示しているが、実際に授業した回数は少なかった、最近、だんだん増えてきて、5月から、やっと時間割にしたがって授業するようになった。また、張さんの話によれば、一学期の始めに、教科書の最初にある台湾の伝統行事、民俗、節気（太陽暦によると年中には24節気がある）などの総括的紹介の単元を学んだあと、学期の中頃まで、教科書はほとんど使われなかった。担当の先生は、40歳位の学級担任の英語専門の先生である。クラスの男子生徒は女子より少ない。彼らはこの授業で楽しくやっていて、皆興味を持っているらしい。近くの「林家花園」への見学の計画があったが、時間がないから、いけなくなった。テストは、実技と筆記試験の2種類があって、実技は、毎週の授業でやるが、筆記試験は期末にやる。

(7) 台北県私立辞修中学への調査

親友の子ども羅さんが私立辞修中学校に通っている。進学校の性格を持つこの学校の「郷土芸術活動」はどのように実践されているかを知るため、羅さんにインタビューした。羅さんによれば、「郷土芸術活動」教科は、正式の課程に取り入れられていないが、学期ごとに郷土芸術活動に関わるイベントが行われる。今まで、彼自分が体験したイベントは二つある。一つは、学校が台湾の伝統的人形劇の布袋戲を招いて、演劇教室を行って、人形劇の実演を見せたこと。もう一つは、台北県の有名な古蹟である三峽祖師廟で生徒たちが撮影会を行って、グループで写真をとったことである。その後、写真展を開いて、多くの保護者が見に来た。

(8) 台北市立福林国民小学への調査

台北市立福林国民小学の学校長の呉隆榮氏に、現在の実施状況を聞くと、「去年より定着している。親子活動のかたちで土曜日を利用して、先生の引率で近くの目的地を訪れることが最も多い。」ことが分かった。よく土曜日を利用する理由について、「郷土教学活動の時間は毎週一時間だけで、実際に学外で見学するには時間が足りません。土曜日の午前中は、2、3時間の利用が可能で、学外の見学にとって良い時間帯です。」と説明した。

この見学活動に使う教材は、学校が編集した『福林国民小学叢書』の一部である『国民小学戶外学習活動手冊』である。また、「郷土教学活動」授業で、低学年、中学年、高学年に分けている『郷土を訪ねる』（『郷土遊蹤』）も使われている。

3. 調査結果による考察

今回の調査より、カセットテープやビデオテープ、ノートで取った子どもたちの感想、授業の様子、教師の意見、教育行政機関関係者の考え方、研究者のコメントなどのインタビュー記録、そして、数多くのビデオ、教科書、文献などの関連資料を入手した。これらの資料の分析により、さまざまな立場からの「郷土芸術活動」の実施状況が次のように認められる。

(1) 主な教材である教科書については、各地方の教育局がすでに各々の地方の特色を取り入れている「郷土芸術活動」教科書を発行している。例えば、今回訪れた台北市、台北県、高雄市、高雄県、宜蘭県などの地域では、実物の教科書がすぐ入手できた。そのほかにも、「郷土芸術活動」の関連教材が、各地方の教育局の出版リストから見られる。また、国立台湾芸術教育館が教育部に依頼され、1998年6月に出版した『台湾郷土芸術教学録影帯資料索引冊』（『台湾郷土芸術授業用ビデオ資料索引冊』）から、国立教育資料館、国立台湾芸術教育館、そして台湾テレビ放送会社などのさまざまな民間団体も郷土教育、郷土芸術の視聴覚教材を発行していることが分かった。

(2) 教科担当の教師数は、一クラス一人というのがほとんどであるが、西松高級中学のような教師の専門能力を生かして、何人かの教師で協力し合って、授業のプロジェクトを作る学校もある。特に、伝統芸術会議での郷土芸術の専門家や、職人たちの話によると、多くの人が講師として学校で教えた経験がある。つまり、学校は、郷土芸術授業における教師の専門能力不足の問題を学校外の社会人材の導入で、解消しようとしていると考えられる。

(3) 授業には、ビデオ、スライド、音楽や映像のCD、実物などさまざまな教具が使われていることが伺える。したがって、学習方法も鑑賞、討論、課外調査、報告、制作、実演、そして、そして、台北市立龍山国民中学、台北県立辞修国民中学のように、龍山寺、三峡祖師廟のような郷土資源を活用しての見学など多面的、多様な方法で取り組んでいることが明らかである。

(4) 教材としては、各地方の教科書以外にも、多くの先生が地方の特色をもっと生徒に分からせるために、補充教材を作っていることが共通に見られる。

(5) 原住民美術工芸は、教科の主要内容として扱われていることによって、

生徒の深い興味を引き出させるほか、原住民文化の保存の重要性も喚起させ、この教科が強調している多元文化教育の目的へ導びく。また、屏東県の古樓国民小学、来義国民中学、台東県の都蘭国民中学、北源国民小学、花蓮県の太巴朗国民小学、化仁国民小学、宜蘭県の東澳国民小学、金洋国民小学校のような数多くの原住民を中心とする小・中学校が、その機織、刺繍、木（石）彫、陶芸、竹・藤編など原住民の地方の伝統的美術工芸の伝承計画に関わっていることが注目されている。

(6) 旗山国民中学のように、多くの学校がインター・ネットを利用してホーム・ページを作り、郷土美術も主な内容の一つとして取り入れている。この普遍的なインター・ネット発信により、郷土美術の情報交換が更に促進されると予測できる。

(7) 「教育部補助国民中小学郷土教学実施計画県市政府執行成果訪視」という各地方の小・中学校における郷土教育の実施に関する評価は、1998年6月上旬に台湾東部の花蓮市で行われた。この活動を通じて、各地方の実施状況、成果を評価するとともに、各地方の関係者に、情報交流の機会を与え、各自の計画にも新しい要素が注がれている。また、主催者である教育部にも、1996年から実施してきた学校の郷土教育を総体的に検視することと新しい方針と計画をたてる貴重な資料を与えたと考えられる。

(8) 国語日報郷土資源センター、蕉城旗山雑誌社のような民間団体は、その研究において、研究者や現場の教師、地方の専門家・職人などの人材資源を積極的に取り組んでいることがよく見られる。中学校の教師と生徒への郷土美術教育の情報提供に重要な役割を果たしている。

第5節 本章のまとめ

小学校の「郷土教学活動」教科の導入にしたがって、中学校にも「認識台湾」と「郷土芸術活動」の二つの郷土教科が新設された。中学校の「郷土芸術活動」教科の性質と内容を解明する、その実施状況を描き出す目的に基づいた本章は、多様な視点を通して考察した結果を整理すると次のようになる。

1. 美術教科にも導入される郷土学習

中学校の美術教科も郷土学習の要素を具体的に取り入れ、教材綱要における「心象表現」領域、「機能表現」領域の素材内容には、各学年共通に生活周辺にある入手しやすい自然素材、人造素材のほか、「郷土文化の特質を持つ素材」への利用が強調されている。そして、「鑑賞」領域も、地方や「社区（コミュニティ）」や、日常生活における自然と人文環境との相互関係とその価値を重視することになっている。また、「実践」領域では、自然資源を鑑賞し、保護することにより、環境保護の意識を喚起し、強化させ、自らの生活芸術化と芸術生活化の理念を実践して、生活の品質的向上と人類の平和へ促進することが示されている。

学校の設備と社会資源（博物館、美術館、文化センター、社区芸術家など）を充分に利用することや、鑑賞教材の選択・編集に教材内容において、生徒の発達と文化背景を配慮し、本土的、地域的芸術品から、次第に多元文化的芸術学習へ発展していくこともねらいとされている。

2. 地方と学校における教材の開発

中学校の「郷土芸術活動」教科の目標は、技能よりも認知と情意が強調されている。教科の内容は、郷土芸術活動への認識、郷土造形活動、郷土芸能活動、郷土芸術の展示と実演の四つの領域で構成されている。その中の郷土造形活動は、平面造形、立体造形芸術、原住民造形と生活との関連、それぞれの様式、模様、色彩が象徴する意味、それぞれの製作技法、過程について説明することを包括し、郷土美術と最も関係深い。その教材の開発は、各地方や、各学校に

任せられてる。学習と指導により多元的、多様な方法の導入が望まれている。

3. 積極的に推進される原住民芸術の伝承

考古学によれば、台湾の原住民が台湾に在住する歴史は、漢民族より長いのは事実であり、台湾の有史前の文化とのつながりもよく指摘される。従来の漢民族を中心とした、中国文化に焦点を合わせた戦後の台湾の教育政策は、原住民文化の独自性を保有する方針ではなく、むしろ彼らを「漢化」（漢民族の生活習慣に化すること）する方針が明らかであった。やがて新しい教育改革が「多元文化を重視する」方針を打ち出した後、民間の動きと連動して、「原住民教育法」草案の制定、原住民各族の文化の独自性に基づいて編成された原住民教育カリキュラムの実施、「芸術教育法」、「文化資産保存法」、「民間芸術保存伝習計画」に関わっている原住民芸術の保存と伝承などの具体策が次々に実施された。

原住民文化のシンボルである原住民の美術工芸についての研究は、日本の学者である伊能嘉矩、新井英夫、佐藤文一などが、すでに早い時期に進めていた。陳奇録、阮昌銳、任先民、劉其偉、施振樞、高業榮、李亦園、明立国などの台湾の学者も知られている。

原住民の美術工芸は、陶器、彫刻、服飾張り縫い、刺繍など、草木編み、建築に分類されている。新設された小学校の「郷土教学活動」教科と中学校の「郷土芸術活動」教科においては、それぞれ郷土美術内容での一つの独立項目として扱われている。また、上述の各種の計画と取り組んでいる原住民の子どもが多い小・中学校においての伝統芸術カリキュラムの導入などが挙げられる。

4. 多視点による考察

教育行政機関、社会教育機関、シンポジウム、民間団体などへの調査から、多視点でそれぞれの実践を見ることができた。伝統芸術会議と国立台湾師範大学が主催した郷土芸術会議の二つのシンポジウムにおいて、原住民服飾製作の指導者との出会いにより、彼女の学校で実践している原住民編織の指導経験を聞かせた。そして、江韶瑩教授の講演により、郷土芸術の文化脈絡を辿った。教育部の郷土教育業務担当者に訪れて、教育部の今の段階における郷土教育施策と郷土教育における各々の領域の教材を各関連教科に取り入れる可能性があるという郷土教育の将来的発展が伺えた。高雄市、台北県、宜蘭県教育局を訪れて、それぞれの実施状況のほか、都会で暮らす原住民の話も伺った。また、

民間団体の国語日報郷土教育資源センターにおいて、その郷土教育に関連する業務を聞かせ、展示内容も見せた。

5. 子どもたちの感想による評価

中学校の「郷土芸術活動」教科の実施状況を考察するために、筆者は1998年の5月に台湾で教育研究機関、教育行政機関、教育現場、関連するシンポジウム、民間団体を対象として現地調査を行った。特に、台北市立西松国民中学、台北市立龍山国民中学、台北県板橋市立重慶国民中学、台北県立鶯歌国民中学、高雄県立旗山国民中学、宜蘭県立復興国民中学、台北県私立辞修中学校の七つ中学校を中心とする調査の結果では、地方の東西南北を問わず、台湾の中学校一年生の子どもが、「ほかの教科に比べて、とても生活に密着していると感じました」、「ワーク・シートも使っています」、「楽しくて全然負担のない教科です」「この教科は将来も続けて存在してほしい」などの声も出た。新しい課程を実施してからのこの10ヶ月間「郷土芸術活動」を楽しく学んでいることが明らかになった。

筆者は、子どもたちの感想を聞くことを今回の現地調査の主な仕事としている。その理由は、子どもの立場に立って、郷土教育を考えることはとても重要なことと認識しているからである。子どもの声を通じて、私たちにさまざまな修正と再出発のヒントになれる評価が与えられると信じている。台湾の研究文献にもまだ見られない、今回の調査結果からまとめた子どもたちの感想は、「郷土芸術活動」教科の価値づけに非常に貴重な資料となると考える。